垂水南遺跡発掘調査概報Ⅲ

大阪府吹田市垂水町

1979年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市教育委員会では、昭和51年度から国庫の補助をうけ、大阪府教育委員会の御指導のもとに緊急発掘調査を実施してまいりました。またビル等の建設にともなう緊急調査もこれと並行しておこなわれ、本書でも明らかにされているように、すでに10余件にも達しようとしています。この間、住居址・水田址をはじめ多くの遺跡・遺物が検出され、垂水・江坂地区の古代史解明に大きな進展がありました。また、学術的にも多くの資料を提供することになりました。本書もその成果のうちの一つとして、明らかにされるものですが、市民・研究者の皆様に多少なりとも参考にしていただければ幸いと存じます。

しかし、このような調査を経ても、本地域の開発状況は著るしいものがあり、遺跡の保存については厳しい現状にあることは事実であります。今後も文化財保存については、誠意努力をかたむける所存ではありますが、市民の皆様におかれましても、今後とも深い御理解と御協力をお願いいたします。

昭和54年3月31日

吹田市教育委員会

教育長　中村勇一

例　　言

1. 本書は、昭和53年度国庫補助事業として行った、垂水南遺跡発掘調査の概要をまとめたものである。

2. 本書については、次の３次にわたる調査を収録した。
   第１次　吹田市垂水町３丁目27―５　昭和53年６月27日～７月19日調査（通算第７次）
   第２次　吹田市垂水町３丁目21―11　昭和54年１月31日～２月５日調査（通算第12次）
   第３次　吹田市垂水町３丁目32―50　昭和54年２月７日～２月１日（通算第13次）

3. 資料の整理は、市教育委員会社会教育課分室にて行った。本文は、藤原学・福本明が分担して執筆し、資料の整理・復元・図化は、岩崎菜穂子・内田裕理子・西崎卓哉・田中晋作・河野郁子・西上知予子・金子裕美の協力を得た。

4. 遺物の実測図は、土器については１：４、石製品は１：２に統一し、遺物番号も本文・図版・挿図ともすべて統一した。

5. 石製品の材質については、関西大学工学部 亀井 清、谷口敬一郎両教授の御教示を得た。

目　　次

第１章　発掘調査に至るまで …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の経過 …… 4
第４章　第１次調査の成果 …… 6
第５章　第２次調査の成果 …… 21
第６章　第３次調査の成果 …… 23
第７章　結　　語 …… 26

第 1 章　発掘調査に至るまで

垂水南遺跡は、大阪府吹田市垂水町３丁目一帯に展開する古墳時代から奈良・平安時代、中世期へと継続する一大複合集落遺跡である。昭和41年、土地区画整理事業の進展に伴って発見されたが、最近に至って、急速な開発行為が始まるまで、発掘調査されることはなかった。

昭和51年６月、ビル新築工事中に多量の土師器が出土し、発掘調査が行われた結果、竪穴式住居址・高床式建築址・土壙などが検出され、明僚な遺構が埋没していることが明らかになった。

つづいて同年度から、国庫補助事業として、緊急発掘調査が開始され、この調査は昭和52年へと継続され、本年度に至っている。そのほか、ビル・マンションの建設に伴って、原因者の負担による調査も数次にわたり、現在までに13件の発掘調査が行われ、検出された遺構は、古墳時代の竪穴式住居址・高床式建築址・大小の土壙・矢板列・堰・河道、奈良時代前期の河道、平安時代初頭の護岸・堰などである。

従来の調査の概要は、次表のごとくである。

次　数	略　　号	調査区	調査時期	調査動機	検　出　遺　構　・　遺　物	備　　考
第１次	TMMA	C－8	S51.6～11	ビル建設による	古墳時代竪穴住居址・高床式建築址・大型土壙・河道跡	
第２次	TMDF	C－7	S51.12	国庫補助	古墳時代遺物、奈良時代前期河道	試掘のみ
第３次	TMNT	C－4	S51.12	国庫補助	古墳時代堰（木組）	
第４次	TMKA	C－5	S52.8	国庫補助	古墳時代竪穴住居址・柱穴群・河道	
第５次	TMNA	C－8	S53.2～3	マンション建築による	古墳時代土器群・竪穴式住居址、平安時代河道	
第６次	TMDa	B－3	S53.4～5	マンション建築による	古墳時代土器群	
第７次	TMAm	D－9	S53.6～7	国庫補助	古墳時代土器群・柱穴小土壙	今回報告分
第８次	TMDF	C－7	S53.9～10	病院建築による	古墳時代矢板列、水田址 奈良時代前期河道	
第９次	TMDI	C－8	S54.1	ビル建築による試掘	古墳時代溝状遺構・土器包含層	
第10次	TMUE	C－6	S54.1	ビル建築による試掘	土師器、木器若干	
第11次	TMYM	C－4	S54.1～2	ビル建築による試掘	古墳時代土器包含層 奈良時代流木層	
第12次	TMDI	D－7	S54.2～3	国庫補助	古墳時代土器包含層	今回報告分
第13次	TMTC	D－10	S54.3	国庫補助	古墳時代土器包含層、中世期畦畔	今回報告分

付 表 1　　垂水南遺跡発掘調査一覧（調査区については第３図参照）

過去10余回にわたるこれらの発掘・試掘調査によって、古墳時代前期から中期にかけての住居域・水田・河道などが、多量の土師器・須恵器・木器等を伴って200メートル×600メートルの範囲をもって、北西から東南に向って、長楕円形に展開していることが明らかにされた。

昭和53年度は、遺跡の南端の把握を目的に、垂水町３丁目27—５と、それに南接する垂水町３丁目32—50の旧豊津中学校跡地の２地点で発掘調査を実施したほか、垂水町３丁目21—11では、昭和53年９月～10月にかけて調査をした垂水町３丁目22—１における矢板列にともなう畦畔状遺構の延長を確認するために、小試掘壙を設定した。また、原因者負担によって、２件の発掘調査が行われ、多くの成果があった。

第２章　位　置　と　環　境

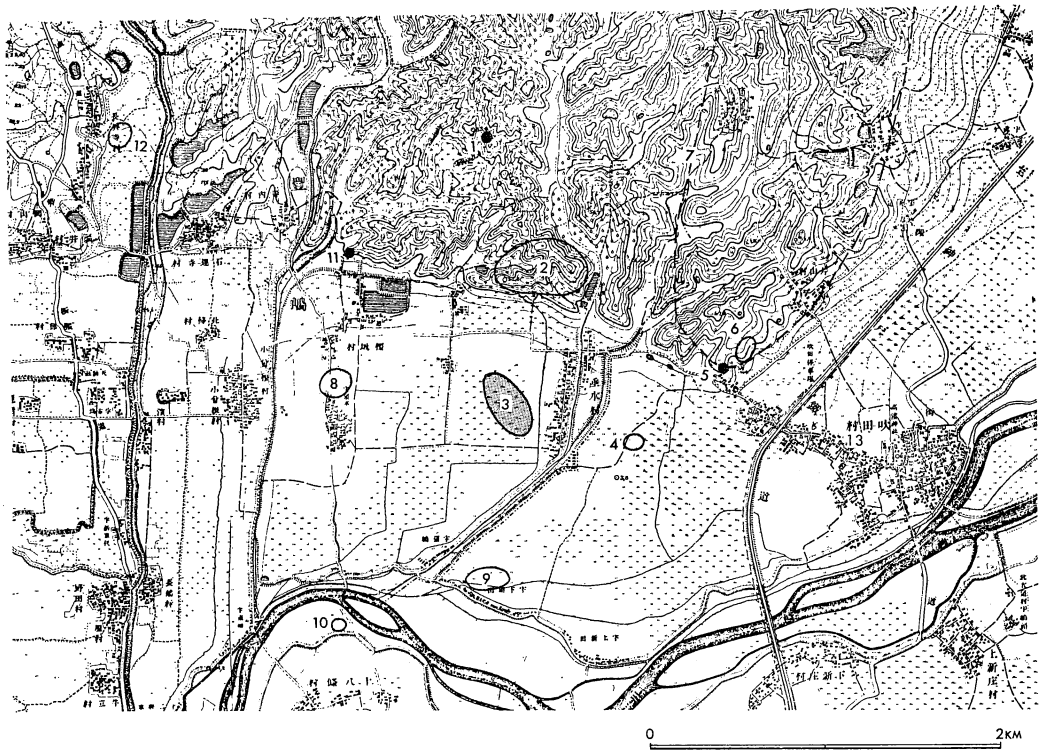
垂水南遺跡は、吹田市垂水町３丁目一帯の沖積平野にあり、現地表の標高は、おおむね３*m*で、地表下の遺構面は、標高1.5*m*～１*m*の典型的な低地性集落址である。[1]当地は、大阪府北部の代表的な前期洪積丘陵である千里丘陵が神崎川・猪名川の大河川の沖積平野に接するところであり、丘陵と沖積平野、そして丘陵から流出する中小の諸河川がからみあった複雑な地形と、そこに居を構えた人間との織りなすドラマが、本地域の歴史そのものともいえるのである。

さて、「垂水」の地名は、吹田市内の地名では最も早くあらわれるところとして特記されなければならない。平安時代初頭にあたる弘仁６年（815年）に編纂された『新撰姓氏録』[2]には、右京皇別条に「阿利真公」が、孝徳天皇の御代（７世紀中頃）に高桶をつくって、難波宮に清水を送った功で、垂水公をさずけられ、垂水神社をつかさどったことが記されている。高桶云々の現実性は別にしても、この地が豊かな湧水点として、古来から認識されていたことは相違あるまい。

また、「行基年譜」に、「垂水里の布施屋」として「垂水」の名が記されている。行基が旅人の救済施設としてつくったこの布施屋は、大和・河内・和泉、山城など畿内の主要路に９箇所記録されており[3]、その中の一つとしてあげられているのである。このことから奈良時代には、この地が、交通の要路として位置づけられることは明白で、それは、地形的にみても、難波宮から北進して、千里丘陵につきあたり、吹田の地から東と西へと分かれる交通路の分岐点にあたることからも裏づけられる。

このように、古代文献からみても、水とは関連の深い交通上の要路であったことがうなづけるばかりでなく、本市においても、開発の最も早く進んだ地域だったのである。

平安初頭（弘仁３年）になると、布施内親王が東寺へ墾田80町余を施入したことがみえ[4]、（垂水庄の立荘）本市における社寺荘園として一はやく記録に出現するのである。このような大社寺の支配の下で、農民は、水との闘いにあけくれたのであろうが、その成果は、本遺跡の東西に流れる糸田川・高川などが天井川として固定されていることでも明らかにできる。これらの



1. 垂水西原古墳
2. 垂水遺跡
3. **垂水南遺跡**
4. 金田遺跡
5. 出口古墳
6. 片山公園遺跡
7. 須恵器窯跡群
8. 蔵人遺跡
9. 五反島遺跡
10. 十八条遺跡
11. 感神宮所在石棺
12. 長興寺遺跡
13. 都呂須遺跡

第 1 図　周辺遺跡分布図

川の固定は、一夜にしてできたものではなく、丘陵と平地との比高差50*m*に近いこの地の治水は、古代・中世を通じての最大関心事であったはずである。

さて、考古学的遺跡を通じて、この地を概観するに、大規模な遺跡は、ほとんどこの地に集中していることによっても、当地の先進性をうかがうことができる。弥生時代中期後半から後期にかけて、北方の丘陵上に展開する垂水遺跡は、千里丘陵最南端の高地性集落として、重要な位置をしめるし、古墳時代前半期の古墳であった可能性の高い垂水西原古墳[5]の出現も、この地の重要性を暗示している。

垂水南遺跡は、このような歴史的背景をうけて、古墳時代前期には出現し、中期にかけて発展する集落で、遺跡範囲では、丘陵上に散開する垂水遺跡[6]には及ばないものの、平地遺跡特有の膨大な、そして多様な遺物・遺構群のあり方は、本市域でも最も密度の高い遺跡といえる。弥生～古墳時代の自然地理環境をみても、上町台地と千里丘陵に挟まれた狭い湾口として、意味づけられ、本遺跡と同時代の遺跡が、東の金田遺跡[7]から、西の蔵人遺跡[8]、さらに豊中市利倉遺跡[9]など、東西に一列に展開するこれら古墳時代集落址をみても興味のあるところである。

第３章　調　査　の　経　過

発掘調査は３次にわたった。第１次調査は、昭和53年６月27日から７月19日まで行われた。垂水町３丁目27－５において、鉄骨２階建ての倉庫付事務所の建設にともなうもので、基礎工事は地表下0.5メートルにしか達しないために、遺構面の直接破壊はまぬがれると判断したので、建物内の試掘を含めた部分調査にとどめた。調査の経過はつぎのとおりである。

６月27日　建物予定敷地内の試掘６箇所を開始

６月29日　Ｇ１・Ｇ２・Ｇ４・Ｇ５の各坪において遺構を検出、以後、遺構・遺物の検出につとめる。

７月３日　建物予定地外の調査（93.5平方メートル）を開始、Ｇ７とする。

７月５日　Ｇ７にて、古墳時代土器包含層の検出に着手する。

７月８日　第Ⅵ層下層において、東側に土器の出土が顕著となることが判明した。

７月10日　本日以後、Ｇ７東側の土器群の検出につとめる。

７月13日　土器包含層より石製模造品出土。

７月14日　石製模造品、さらに２点出土。

７月15日　土器出土状態の写真撮影をする。

７月17日　土器群の実測図作成および、とりあげ。最終段階にて、小土壙１基を確認する。

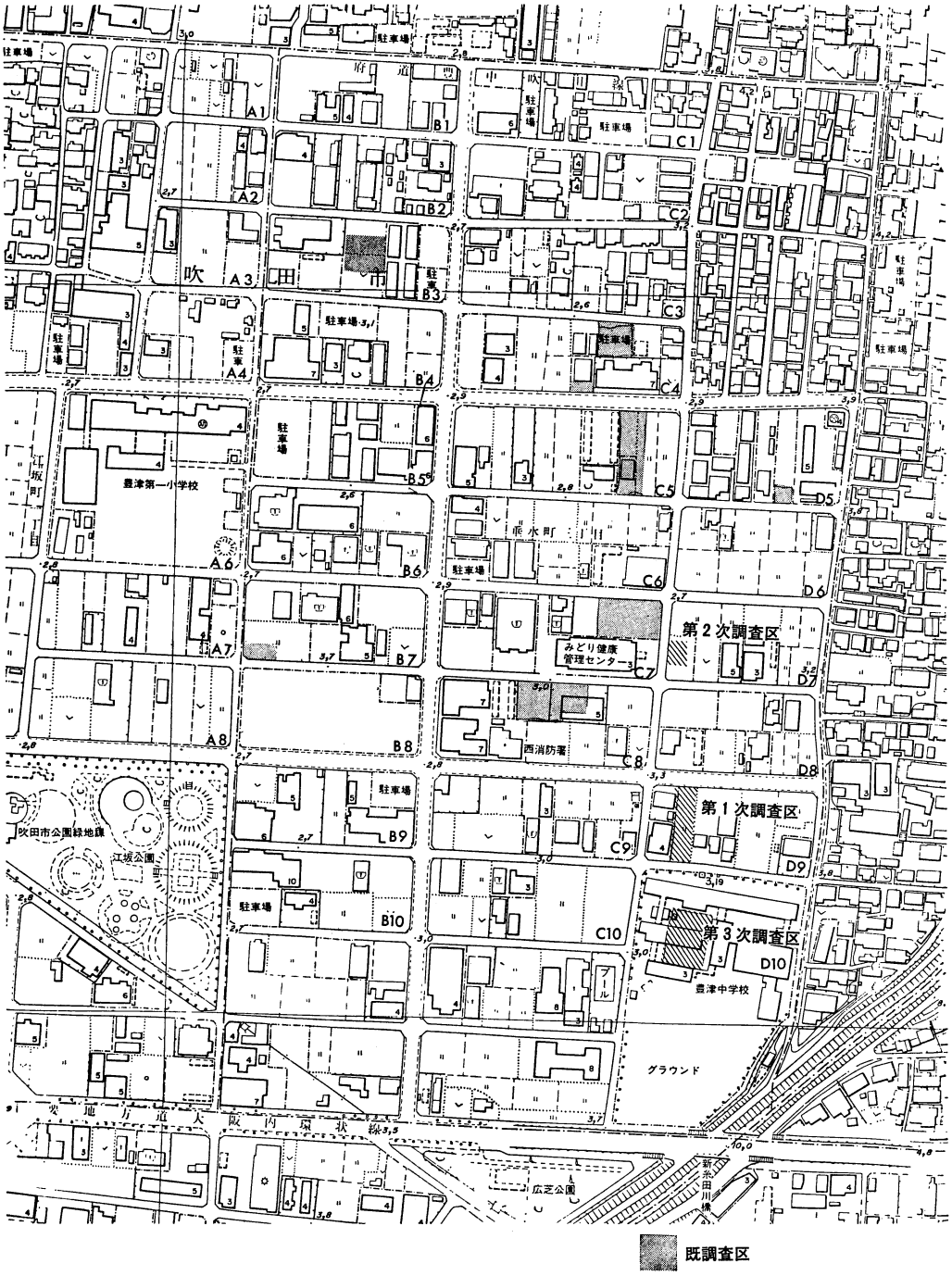
７月18日　土層断面図を作成する。

７月19日　若干の補足的な調査を行なう。本日にて調査終了。

第２次調査は、昭和54年１月31日から開始された。

調査地点は、垂水町３丁目21－11で、遺構面に達しない軽易な建築物のため、小規模な試掘にとどめた。特に昭和53年９月～10月にかけて垂水町3丁目22－1で検出された水田畦畔とみられる古墳時代矢板列の延長線上にあたる部分に、5.6メートル×2.3メートルの試掘壙を設定し、東南に向っていた。畦道跡を追求した。調査は２月５日までつづけられたが、さきに検出されたほど顕著な粘土面は検出できなかったものの、延長線上にあたる個所で、高さ0.2メートル、巾５メートル以上の粘土層の高まりが確認され、同様な粘土面がつづいていることが確認されさた。２月５日土層断面図を作成し、平板上に位置を記録して、調査を終了した。

第２図　調査風景



第 3 図　昭和53年度発掘調査区位置図(1:5,000)

第３次調査は、昭和54年２月７日から開始された。本年度の第１次調査で確認された遺構や土器群の状況からみて、旧豊津中学校内まで、遺跡の範囲がおよんでいることが予測されたため、学校跡地の校舎間に試掘壙を設定した。調査は重機によって、盛土部分と旧水田面の掘削を行ったが、中世期のものと思われる遺構を検出したため、以下の層については、すべて手掘りにより、層序的な発掘をすすめた。調査の経過はつぎのとおりである。

２月７日　重機を導入し、校舎間の空地の２カ所に、試掘壙Ⅰ・Ⅱを設定した。試掘壙Ⅱより、中世期のものと思われる水田畦畔と、水落し跡を検出した。

２月８日　水田畦畔面および水田面を精査し、写真撮影をする。以後、関連畦畔面を検出するため、試掘壙Ⅱを東側へ拡張する。

２月９日　試掘壙Ⅰを青灰色砂層まで掘り抜き、調査を終了する。

２月12日　試掘壙Ⅱは、古墳時代の土器包含層に達するも、遺物の出土はきわめて少ない。

２月14日　試掘壙Ⅱの写真撮影・土層断面図作成、さらに試掘壙北壁より、完形甕形土器を検出した。

２月17日　重機により、埋戻しをして、調査を終了した。

なお、発掘調査は吹田市教育委員会 藤原 学が担当し、関西大学文学部 考古学研究室 大井勝則、福本 明、田中晋作、米田文孝、山口卓也、西岡幸治、黒坪一樹、服部聡志、柴田信次、西本安秀、来村多加史、白神典之、加藤淳一、内田裕理子、岩崎菜穂子の各氏の応援をうけ、地元からは、鍋島敏也氏の参加を得たほか、若村正博氏からは、多くの情報を得た。記して謝意を表する。

第４章　第一次調査の成果（垂水町３丁目27－５）

１．遺　構

建物の予定地内に６個所のトレンチ（２メートル×２メートル）を設置し、西列の北から南へ順次Ｇ１・２・３とし、東側の北から南へ、Ｇ４・５・６と呼称した。建物南側には7.9メートル×8.2メートルの調査区を設定し、各トレンチにおいて、層序発掘を行ない、遺構・遺物の検出につとめた。建物南側のものはＧ７とした。

基本的層序　各区ともⅠ層（表土層）よりⅣ層まで同一な層序を示した。

層　位	土　質・色　調	所　見
Ⅰ　層	黒　色　土　層	表土層。
Ⅱ　層	灰　白　色　砂　層	近世陶磁器片を含む粗砂層。

Ⅲ 層	灰色粘土層	中世期か、遺物は極めて少ない。
Ⅳ 層	灰色砂層	奈良末・平安初頭の土師器、黒色土器を含む細砂層。
Ⅴ 層	暗灰色粘土層	6世紀の須恵器を含む古墳時代後期の土層、遺物は極めて少ない。
Ⅵ 層	灰黒色粘土層	布留式土器、古式須恵器を多く含む。古墳時代土器包含層。
Ⅶ 層	暗灰色砂質土層	布留式土器を多く含む。特に、砂片も大きくなり、完形品がⅧ層に密着して出土する。
Ⅷ 層	青灰色砂質土層	検出遺物はなく、下にゆくにしたがって序々に砂質化がすすむ。

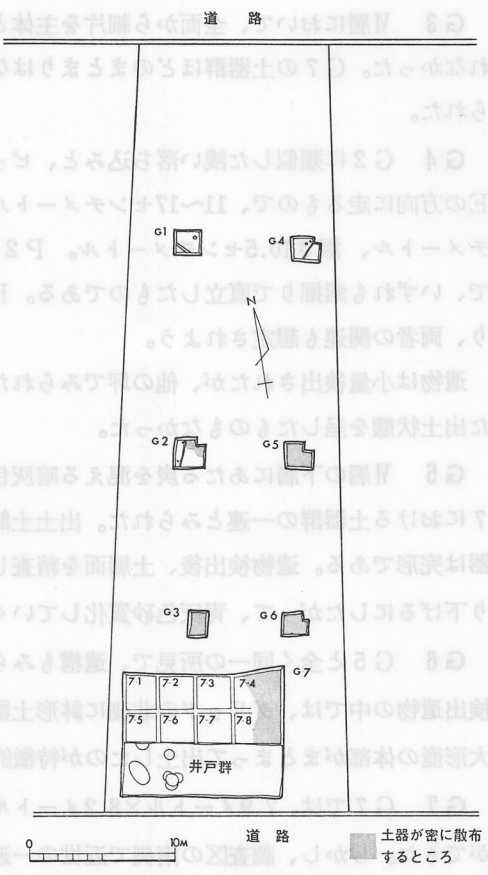
付表 2　第1次調査土層一覧表

このⅥ・Ⅶ層は、土器を多量に包含していることから、本遺跡の主体をなす黒色粘土層に相当するものである。

G1・G2・G4では、柱穴・溝・落込みなどの遺構が検出され、G7では小土壙が北東端で検出された。また多量の遺物に伴ってうすい炭層が随所で検出されるなど、この地に住居址の存在を予想される所見が得られた。しかしG1～G6は2メートル四方の小規模な坪掘りのため、各坪間相互の関連を明らかにすることができなかった。

G7では、やや広い範囲の調査ができたが、調査区の東辺に、土師器を主体とする土器群が検出されたが、土器群下層に、小柱穴状遺構1・小土壙1を検出したのみで、住居址等の明確な遺構はみとめられなかった。

次に、各坪ごとに調査所見を概観する。



第 4 図　第1次調査調査区位置図

G1　Ⅵ層最上面に、薄いスミ混りの黒灰色土があり、この面から小溝および柱穴が検出された。溝は巾15～18センチメートル、深さ8～11センチメートルのもので、N—40°—Wの方向にほぼ水平に走っている。

柱穴は、溝より0.74メートル離れて、ほぼ同一レベルで検出されたもので、30×40センチメートルの、やや不整楕円形の掘り方に、

直径12センチメートル、深さ30センチメートルの柱痕をもつものであった。

この遺構面の直下に甕形土器を主体とする土器群があり、生活面が、溝・柱穴の以前にも存在することが明らかである。

G2　Ⅵ層上に、G1の柱穴面に相当すると思われる3センチメートル前後の炭混り黒灰色土層があり、この層下の青灰色砂質土を、6～10センチメートル掘り込んだ落込みが検出された。この落込みにそって、柱穴が2カ所あり、その他、落ち込み外に1カ所、内には2カ所（他に浅く不鮮明なもの5カ所）のピットがあり、落ち込み内には、ベースに密着して、2群の土器群が検出された。

落ち込みラインにそって検出されたピットは径7～15センチメートル、深さ7～15センチメートルで、それほど深いものではない。また、他のピットも、径5～16センチメートル、深さ3～8センチメートルで、特にP3とP4は、大きく傾いて開口しているが、傾きの方向は同一ではない。

G3　Ⅵ層において、全面から細片を主体とする土師器が検出されたのみで、遺構は認められなかった。G7の土器群ほどのまとまりはない。検出遺物の中に微量の須恵器細片もみとめられた。

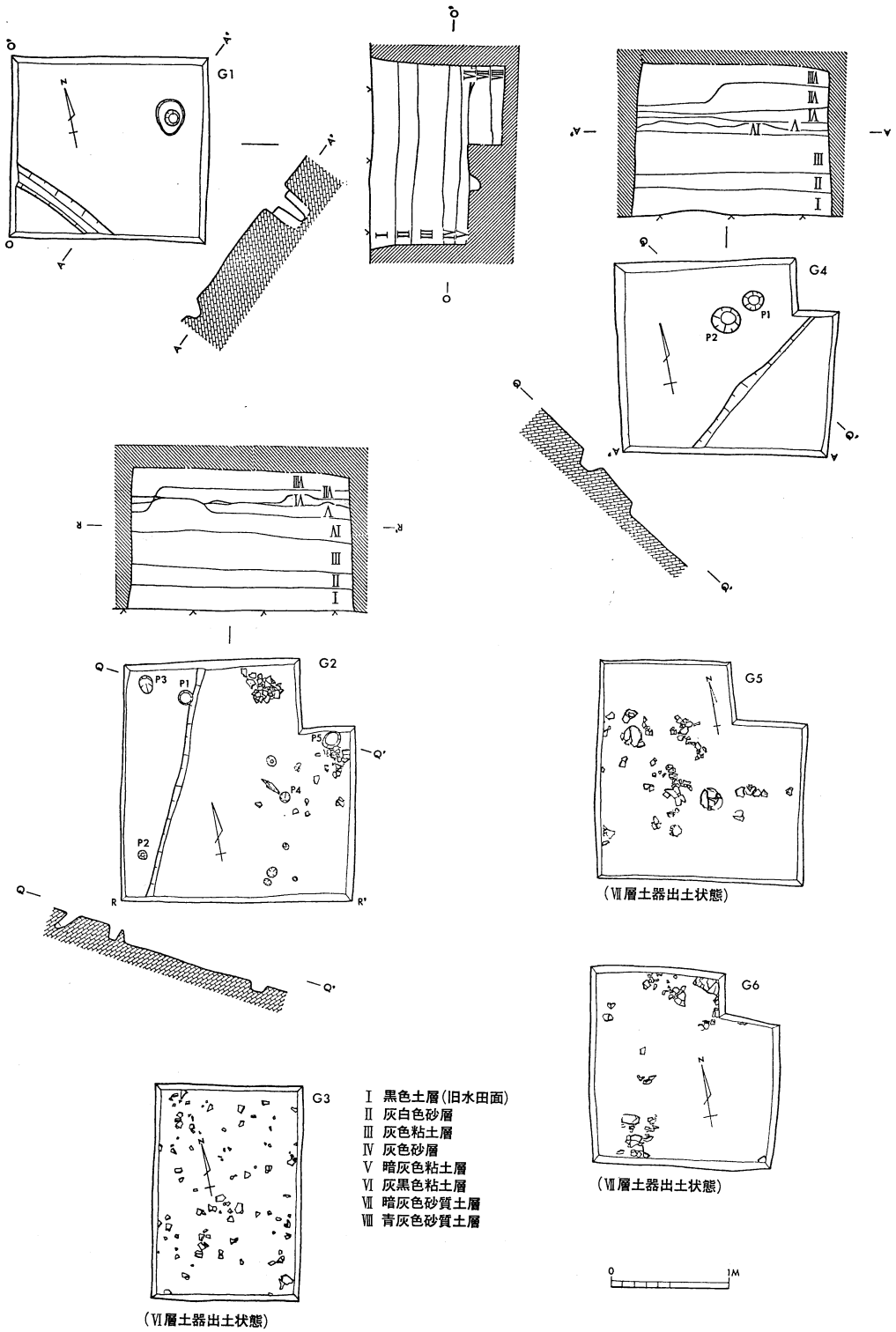
G4　G2に類似した浅い落ち込みと、ピットが2カ所検出された。落ち込みはN―50°―Eの方向に走るもので、11～17センチメートルの深さをもっている。ピットはP1が径15センチメートル、深さ10.5センチメートル。P2が径23センチメートル、深さ8.5センチメートルで、いずれも素掘りで直立したものである。P1とP2は東側の落ち込みと並行して並んでおり、両者の関連も想定されよう。

遺物は小量検出されたが、他の坪でみられたような濃密な土器群はなく、また遺構に関連した出土状態を呈したものもなかった。

G5　Ⅵ層の下層にあたる炭を混える暗灰色砂質土層に、比較的良好な土師器群があり、G7における土器群の一連とみられた。出土土師器は、比較的まとまっており、このうち鉢形土器は完形である。遺物検出後、土層面を精査したが、遺構を検出することができず、下層へ掘り下げるにしたがって、青灰色砂質化していくのみであった。

G6　G5と全く同一の所見で、遺構もみられず、G7で検出した土器群の一部とみられる検出遺物の中では、グリッドの北側に鉢形土器が完形で出土した。またグリッドの南側では、大形壺の体部がまとまって出土したのが特徴的である。

G7　G7では、7.9メートル×8.2メートルと、G1～G6に比べて、やや広い範囲の調査ができた。しかし、調査区の南側で近世の一連の井戸を検出し、さらに排土置場の確保ができなかったため、古墳時代の土器包含層まで掘りえたのは、このうち、8.2メートル×4.7メートルの範囲である。第Ⅴ層下を層序的に掘り下げた結果、調査区の東端で、濃密な土器片群が検出されはじめ、住居址等の遺構の存在が予想されたので、グリッド調査に切りかえた。グリッ



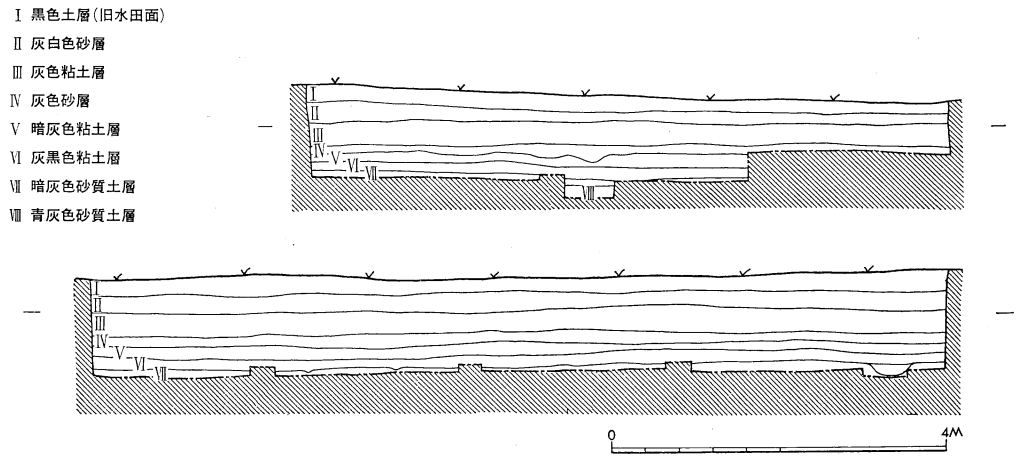
第 5 図　第1次調査G1～G6　平面及土層断面図

トは8カ所設定し、北側西から東へ、G7－1～G7－4、南側も西から東へ、G7－5～G7－8とした。Ⅵ層のスミを混える灰黒色粘土層には、G7－1・G7－2・G7－5では小量の土器細片を検出したのみであった。G7－3では須恵器片を含む土師器片が散見され、G7－6では甕形土器を主とした、ややまとまった土師器の出土をみた。G7－7では、吉備系の甕形土器1個体が横倒しの状態で検出された。

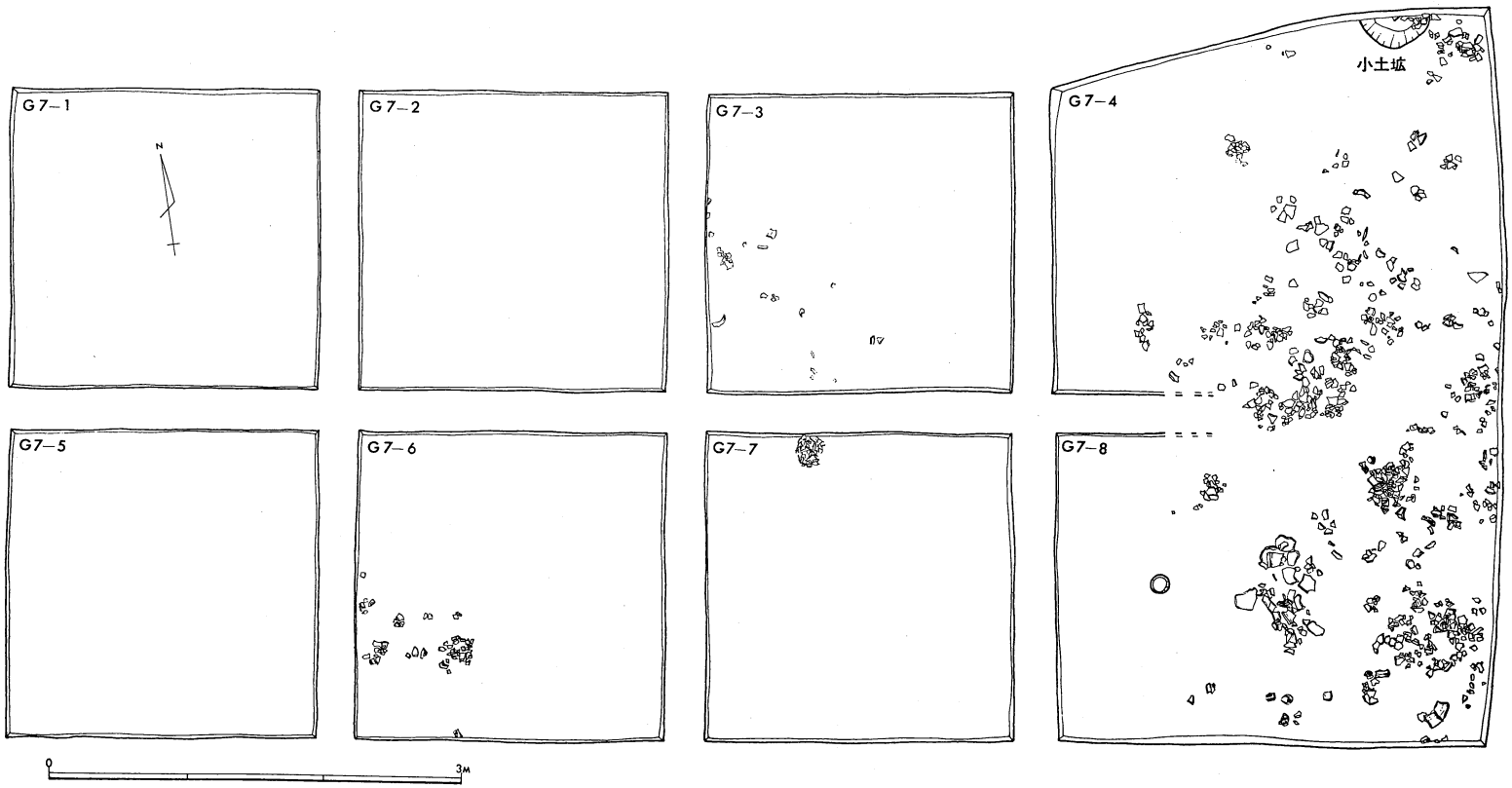
G7－4・G7－8では、東側全面に濃密な土器群が検出された。この土器群は、ほぼ平坦に土器片が散在するもので、特別な遺構に伴った検出状況を呈するものではない。ただ、土器群自体が、第Ⅷ層の土層の傾きにそって、東側へ向ってやや高くなる傾向にあり、本土器群の西端と東端では約10センチメートルのレベル差がみとめられ、この土器群中の検出土器はすべて土師器で、須恵器はみとめられない。土器の出土状況自体に規則性はないが、全体的に散在しつつも、一応10数の個体としてのまとまりがあり、それほど遠くから移動してきたような状況ではない。したがって、G1～6で検出された柱穴などの遺構群との関連があると考えてよいであろう。

土器取上げ後、Ⅵ層の土層面を精査した結果、G7－8において、径16センチメートル、深さ10センチメートルの柱穴様ピットが検出され、G4においては、北壁に長径50センチメートル、深さ10センチメートルの、やや不整形な小土壙が検出されたのみであり、小土壙内からは甕形土器片若干と木片が検出された。

7区の全域において、明確な遺構が検出されなかったので、中央に東西方向のトレンチを入れ、下層の状態を調査したが、土器群下は次第に青灰色砂質化し、遺物・遺構は検出されなかった。



第 6 図　第1次調査　土層断面図（上：東壁・下：北壁）



第 7 図　第 1 次調査 G 7 平面図

2. 近世の遺構

古墳時代以降のものとしては、G７調査区の西南端で検出された井戸群がある。総計７基の井戸が確認されたが、第Ⅲ層から切り込まれており、また出土磁器から判断するかぎり、近世期のものといえる。３・４・５・６井戸は、同一地点に重復して検出されており、この地で幾度にも井戸が掘りかえられたらしい。

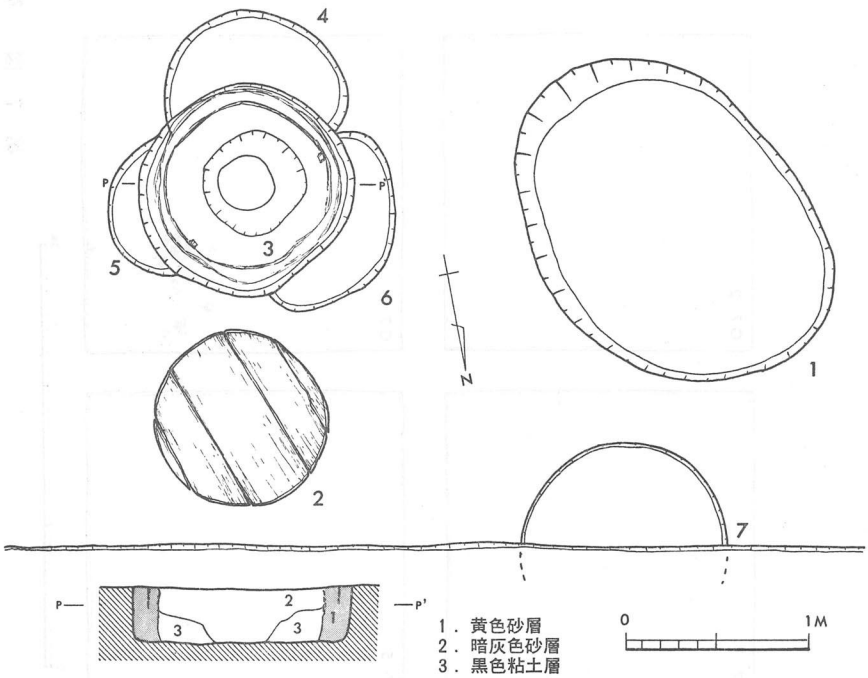
１号井戸　長径２メートル、短径1.46メートルの随円形の掘り方をもつ井戸で、内部の井戸枠等はすでに取り除かれ、中に暗緑色粘土混りの黒泥質の土が投入されていた。

２号井戸　円形桶を井戸枠につかった井戸らしいが、底板が遺されていたのみで、上部は不明である。底板は直径0.94メートルの正円形で、厚さ2.3センチメートルの４枚の板を、竹釘によって合成したものである。

３号井戸　一連の井戸群の中で、最も原形をよく遺存していたものである。直径1.18メートルの正円形の掘り方の中に直径0.56メートルの小円形の掘り方をもっていることなどから、上下二段構造の井戸とみられる。掘り方には二重に竹製のタガが遺っていた。

４・５・６号井戸　３号井戸に先行して掘られた井戸で、相互に重復しているため、井戸枠などはみられず、構造は不明であるが、直径１メートル前後の井戸である。いずれも、白灰色砂と黄白色砂が充満している。

７号井戸　直径1.14メートルの正円形の掘り方をもつ井戸で、内部に青灰色土まじりの黄色砂が充満している。使用の中絶とともに埋めもどされたようである。

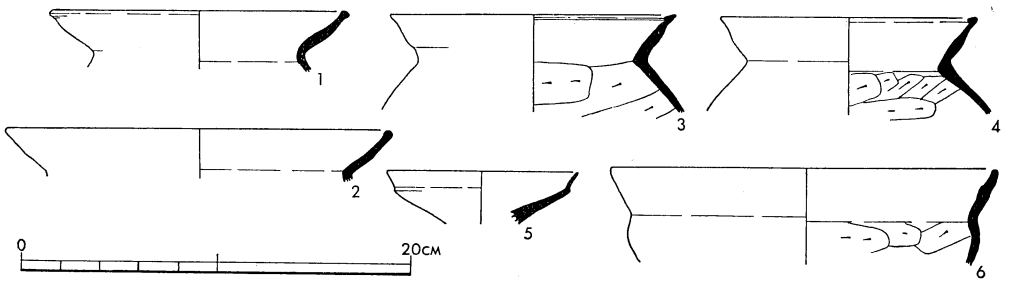


第 8 図　井戸平面図及断面図

3. 出土遺物

第1次調査では、第2層および近世井戸群にともなって、近世陶磁器細片が少量出土しているが、本節では、古墳時代遺物のみを取扱う。

既に述べたように、古墳時代土器は、Ⅵ・Ⅶ層から出土している。Ⅵ層は、スミ混りの灰黒色粘質土であるが、既して破片も小さく、まとまった土器も少ない。これに比して、Ⅶ層になるとG5・G6あるいはG7の土器群のように遺構の有無にかかわらず、破片も大きく、完形土器を含めてまとまった出土状態を呈している。



第 9 図　G1、2、3出土土器実測図

＜TMAmG1＞　　付表3

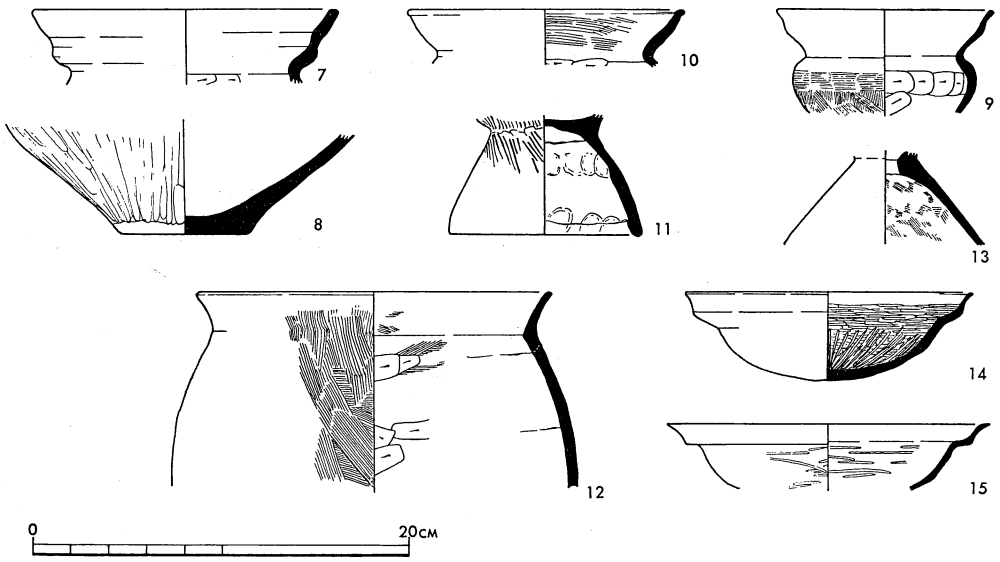
No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
1	甕	口径：15.4cm 現存高：3.2cm	口縁部は、弓状に内湾し、端部は方形におさまる。内外面とも横ナデ。	G1 第Ⅵ層 土器群B	内面：乳灰色 外面：乳黒色 断面：乳灰色	微砂粒を含む
2	甕	口径：19.6cm 現在高：2.7cm	口縁部はゆるやかに内湾し、端部はやや肥厚して、丸くおさまる。内外面とも横ナデ。	G1 第Ⅵ層 土器群B	内面：黄灰色 外面：黄灰色～灰色 断面：〃	砂粒を含む

＜TMAmG2＞　　付表4

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
3	甕	口径：14.6cm 現存高：5.2cm	口縁部はくの字形に屈曲外反し、端部で内傾して、内側に段を有す。口縁部は内外面とも強い横ナデ、体部内面は横篦削り（左→右）	G2 土器群	内面：淡灰色 外面：〃 断面：〃	0.1cm位の細砂を含む
4	甕	口径：13.3cm 現存高：5.2cm	口縁部はくの字形にゆるやかに屈曲外反し、端部は内側に段を有す。口縁部内外面および体部外面は丁寧な横ナデ。体部内面は斜め篦削り（左下→右上）	G2 土器群	内面：淡灰褐色 外面：〃 断面：〃	砂粒を多く含む

＜TMAmG3＞　　付表5

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
5	器台	口径：9.8cm 現存高：2.7cm	受部はわずかに内湾し、端部は外反しながら短かく立ちあがる。受部内外面ともにていねいな横ナデ。	G4 第Ⅵ層	内面：灰褐色～黒褐色 外面：〃 断面：〃	微砂粒を多く含む
6	鉢	口径：19.8cm 現存高：5.0cm	口縁部は内湾ぎみに開き、上端部でやや内傾し、端部は丸くおさまる。体部内面は横篦削り（左→右）	G4 落ち込み内	内面：灰色 外面：灰白色～灰色 断面：暗灰色	微砂粒を含む



第 10 図　G 5 出 土 土 器 実 測 図

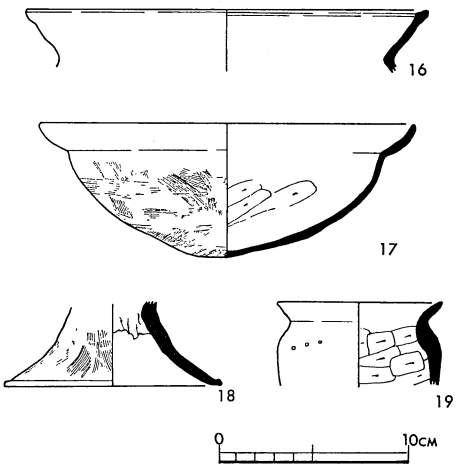
＜TMAmG 5＞　　代表6

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
7	壺	口径：16.2cm 現存高：4.0cm	口縁部の中途に、外側に鈍い稜を内側にゆるやかな段を形成し、二段に屈折する。端部はやや内湾する体部内面は横篦削り（右→左）	G 5 第Ⅵ層 土器群	内面：乳灰色 外面：〃 断面：黒灰色	砂粒を多く含む
8	壺	底部径：6.7cm 現存高：5.3cm	平底で、外面は篦磨き、内面は横ナデ。底部には木葉の圧痕が残る。	G 5 第Ⅶ層 土器群D	内面：乳白色 外面：乳白色～乳青色 断面：〃	0.1～0.2cm位の砂粒を多く粗雑な胎土
9	小型丸底壺	口径：11.5cm 体部径：9.8cm	口縁部は外反したのち、やや内側へ折曲し、さらに外方へのびる。端部は丸くやや肥厚する。体部外面は刷毛、内面は強い篦削り。（左→右）	G 5 第Ⅵ層	内面：乳白色～黒灰色 外面：乳白色 断面：黒灰色	白色微砂を含む
10	甕	口径：14.6cm 現存高：3.1cm	口縁部はゆるやかに内湾し、端部は肥厚して、内側に段を有す。口縁部内面は荒い刺毛、体部内面は横篦削り（右→左）	G 5 第Ⅶ層	内面：乳灰色 外面：乳灰色～乳黒色 断面：乳灰色	黒雲母を多く含む
11	甕	底部径：10.2cm 現存高：6.4cm	脚台端部内面には折り返しを持ち二段の指圧痕がみられる。脚台外面は荒い縦刷毛。東海地方に多くみられる甕の脚台である。	G 5 第Ⅵ層	内面：灰褐色 外面：赤褐色～褐色 断面：灰褐色	0.1cm位の砂粒を含む
12	甕	口径：18.7cm 現存高：10.3cm	口縁部はゆるやかに外反し、口頸屈折部内面に段を有す。体部内面は篦削り＋刷毛。体部外面は縦刷毛。	G 5 第Ⅶ層	内面：淡茶色 外面：濃茶色～淡茶色 断面：〃	微砂粒を多く含む
13	器台	頸部径：3.2cm 現存高：4.9cm	受部と脚部が貫通する。脚部は直線的に広がる。脚部内面は荒い刷毛。	G 5 第Ⅵ層	内面：乳灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土

14	鉢	口　径：15.2cm 器　径：4.8cm	口縁部は2段に屈折し、端部はゆるやかに外反し、やや肥厚する。屈折部外面にはゆるやかな稜を有す。体部内面は横篦磨きののち放射状篦磨き。	G5 第Ⅶ層 土器群B	内面：乳褐色 外面：乳褐色～乳黒色 断面：乳褐色	精良な粘土
15	鉢	口　径：17.2cm 現存高：3.5cm	口縁部は2段に屈折し、端部は外反する。屈折部外面には稜を有す。体部は内外面とも荒い篦磨き。	G5 第Ⅶ層 土器群	内面：乳灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土

また、Ⅵ層ではG3・G7において明らかに古式須恵器をともない、Ⅶ層ではいずれのグリッドや土器群においても須恵器は認められない。Ⅶ層にみとめられた土器群の検出に際して、双孔円板や鏃形石製品のような石製模造品をともなうことは注目すべきことである。さらに、G5・G6のような大形の鉢や大型壺をともなうなど、器種においてバラェティがあり、また東海系台付甕(11)(44)(45)や吉備系甕(31)など地方性のある土器が伴出した。

多量の遺物を検出したこれらの土器群は、住居址や土壙などの遺構にともなったものでないが、遺物の内容については注目に値するものが多い。

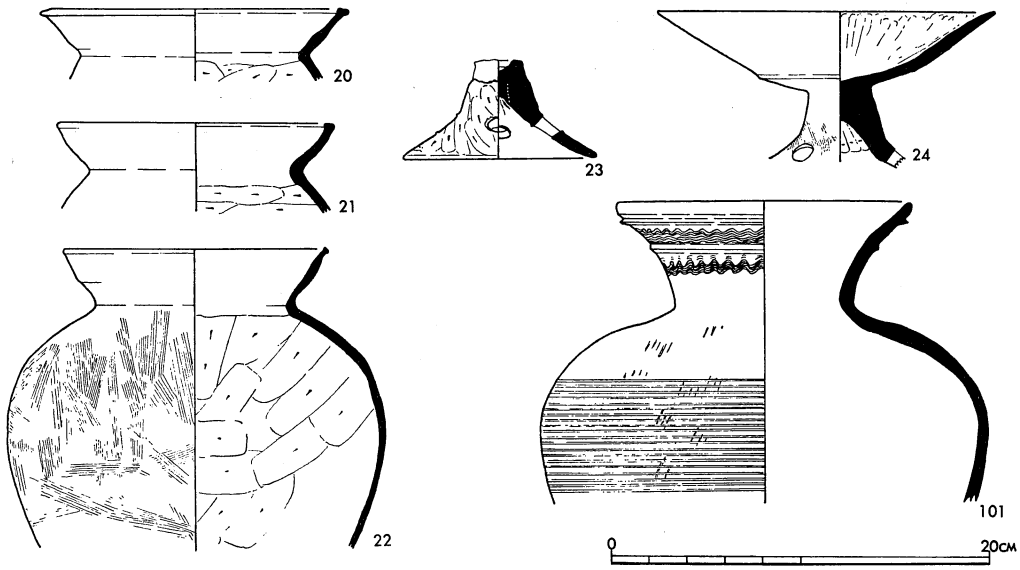


第 11 図　G6出土土器実測図

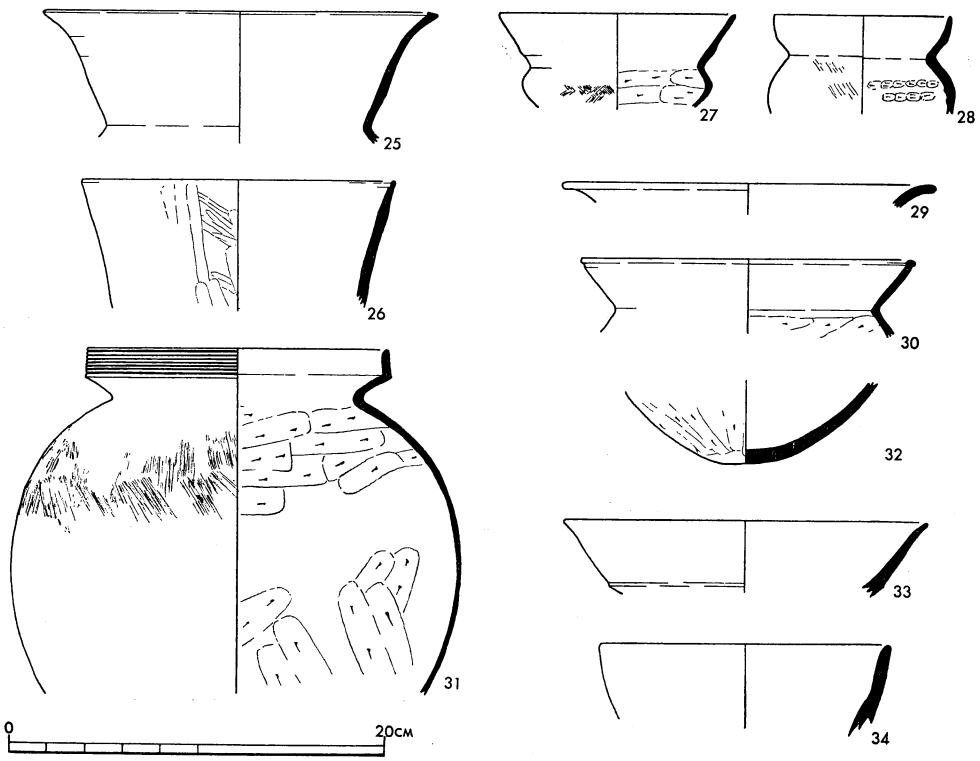
＜TMAmG6＞

付表7

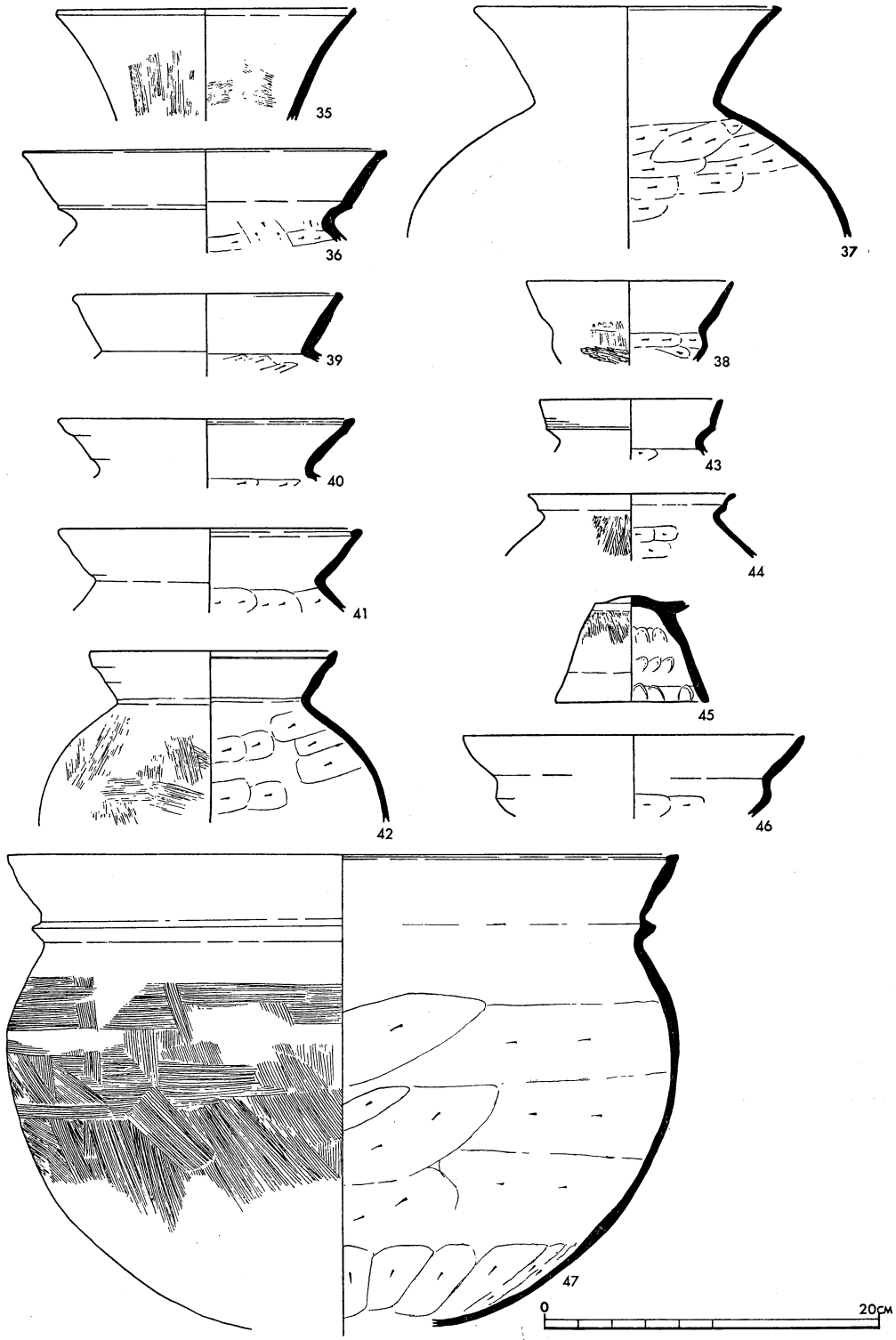
No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
16	甕	口　径：21cm 現存高：3.5cm	口縁部はわずかに内湾し、端部は肥厚して内側に段を有する。口縁部内外面とも横ナデ。	G6 第Ⅵ層 土器群	内面：暗灰色 外面：〃 断面：〃	雲母を含む
17	鉢	口　径：19.8cm 器　高：7.2cm	口縁部は屈折し、肥厚しながら内湾する。端部は丸くおさまる体部外面は不定方向の刷毛。内面は斜め篦削り。（左下→右上）	G6 第Ⅵ層 土器群	内面：黄灰色～黒灰色 外面：白灰色 断面：黄灰色～黒灰色	微砂粒を多く含む
18	高杯	底部径：11.6cm 現存高：4.2cm	裾端部は丸みをもち方形におさまる。脚部外面は縦刷毛、1段の接合痕。	G6 第Ⅵ層 土器群	内面：乳灰色～乳黒色 外面：乳灰色 断面：乳灰色～乳黒色	微砂粒を含む
19	小型壺	口　径：8.4cm 現存高：4.4cm	口縁部は短かく外反し、端部は丸い、肩部が張り、外面に貫通しない3個の小孔（径0.2cm）がある。体部内面は横篦削り（左→右）	G6 第Ⅵ層	内面：黄白色 外面：〃 断面：黄白色～黒灰色	白色砂粒を多く含む



第 12 図　G 7 第Ⅵ層出土土器実測図



第 13 図　G 7 第Ⅶ層出土土器実測図



第 14 図　G 7 土器群出土土器実測図

<TMAmG7>

付表8

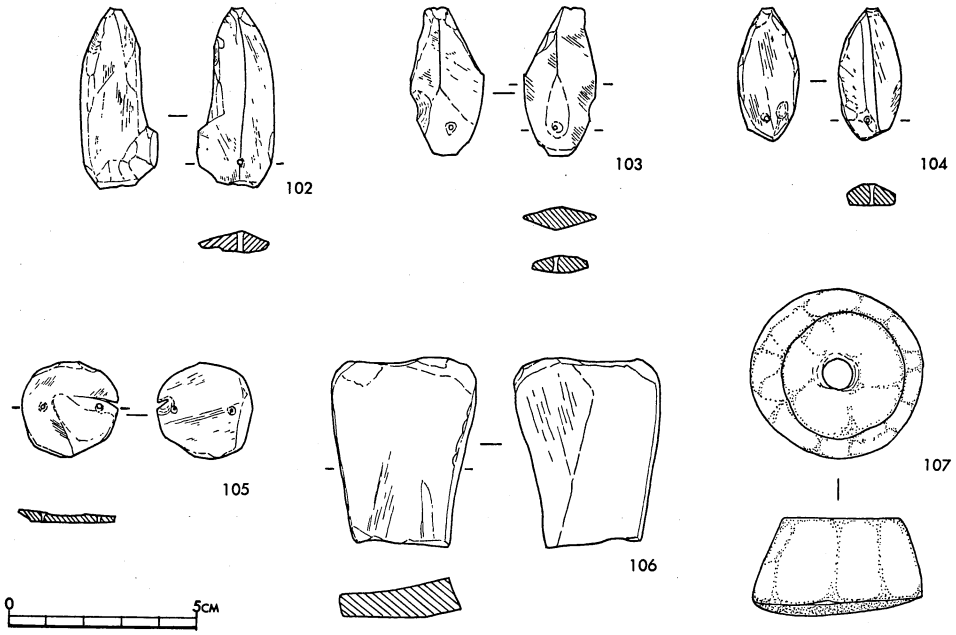
No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
20	甕	口径：16.4cm 現存高：3.9cm	口縁部は外湾ぎみに上方にのびた後、端部付近で外傾し狭い面をつくる。体部内面は横篦削り。(左→右)	G7 第Ⅵ層	内面：乳灰色 外面：乳灰色～乳黒色 断面：乳黒色	砂粒を多く含む
22	甕	口径：14.0cm 体部径：20.0cm 現存高：15.8cm	体部よりくの字形に屈曲外反する口縁部、体部外面は不定方向の刷毛、内面は斜め篦削り。(右上→左下) 外面には煤付着。	G7 第Ⅵ層	内面：褐色 外面：暗褐色～黒色 断面：褐色	0.1cm位の砂粒を含む
23	高杯	底部径：10.4cm 現存高：5.4cm	脚端部は丸みを持つ方形におさめる。外面は縦篦削り（下→上）内面は絞り目。外方より4孔が穿たれる。	G7 第Ⅵ層	内面：黄灰色 外面：〃 断面：黄灰色～灰色	砂粒を多く含む
24	高杯	口径：17.8cm 現存高：8.1cm	杯部下半部は内湾しながら伸び、上半部は直線的に広がる。脚部は屈曲して広がる。透しは3孔。杯部内面は縦篦磨き、脚部外面は刷毛。	G7 第Ⅵ層	内面：黄白色 外面：〃 断面：黄灰色	0.1cm位の砂粒を多く含む
25	壺	口径：16.6cm 現存高：6.8cm	斜め上方にやや外湾ぎみに伸びる口縁部。端部は薄く丸くおさめる。外面は斜め篦磨きののち縦篦磨き。	G7－7 第Ⅶ層	内面：暗乳灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
26	壺	口径：20.8cm 現存高：7.1cm	口縁部は斜め上方にやや内湾ぎみに伸び、端部近くで外反する。端部は肥厚し狭い面をなす。	G7－7 第Ⅶ層	内面：茶灰色 外面：〃 断面：黒灰色	砂粒を多く含む
27	小型丸底壺	口径：12.6cm 現存高：5.0cm	口縁部は基部で外反し、直線的に伸びる。端部は丸くおさめる。体部外面は刷毛、内面は横篦削り。(右→左)	G7－7 第Ⅶ層	内面：灰褐色 外面：黄灰色 断面：〃	0.1cm位の砂粒を含む
28	小型壺	口径：9.4cm 現存高：5.2cm	口縁部は短かく、弓状で内湾ぎみに上方に開く、端部は丸くおさめる。体部外面は刷毛＋横ナデ、内面は横篦削り、外面刷毛。	G7－7 第Ⅶ層	内面：乳褐色 外面：黄灰色 断面：黒灰色	微砂粒を多く含む
29	甕	口径：19.8cm 現存高：1.1cm	口縁部は強く外反し端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデ。	G7－2 第Ⅶ層	内面：黄灰色～黄褐色 外面：黄褐色～黒灰色 断面：黄灰色～黄褐色	白色微砂粒を多く含む
30	甕	口径：17.7cm 現存高：4.0cm	口縁部はやや内湾ぎみにのび、端部は肥厚して内外に段を有す。体部内面は斜め篦削り。(左下→右上)	G7－1 第Ⅶ層	内面：灰白色 外面：灰色 断面：褐色	0.1～0.2cm位の砂粒を含む
31	甕	口径：16.0cm 体部径：23.9cm	口縁部は短かく直立し、櫛描き直線文を加える。体部外面は細かな刷毛、内面上位は横篦削り(左→右)下位は縦篦削り(下→上)吉備地方に多くみられる甕。(外面煤付着)	G7－7 第Ⅶ層	内面：黒灰色 外面：黒色～黄灰色 断面：黒灰色	白色微砂粒を多く含む
32	甕	底部径：1.8cm 現存高：4.3cm	底面外面は未調整な平坦部が残る。底部外面は縦篦削り（下→上）ののち不定方向のナデ。	G7－2 第Ⅶ層	内面：暗黄灰色 外面：〃 断面：〃	0.1cm位の白色砂粒を含む
33	高杯	口径：19.2cm 現存高：3.9cm	杯部上半部はやや外反ぎみに広がり、端部は丸くおさまる。内外面とも横ナデ。	G7－7 第Ⅶ層	内面：暗灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
34	鉢	口径：15.4cm 現存高：5.1cm	底部より内湾して移行し、直線的に立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面とも強い横ナデ。	G7－7 第Ⅶ層	内面：黄褐色 外面：赤褐色～灰褐色 断面：灰色	微砂粒を多く含む

<TMAmG7　土器群>　　付表9

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
35	壷	口径：17.8cm 現存高：6.8cm	斜め上方にやや外湾ぎみに伸びる口縁部。端部は方形におさめる。口縁部内外面とも刷毛。	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：灰褐色 外面：〃 断面：〃	白色微砂粒を多く含む
36	壷	口径：10.8cm 現存高：5.5cm	口縁部は2段に屈曲し、上方は直線的に広がる。端部は方形におさめ、狭い面をつくる。体部内面は横篦削り(右→左)＋縦篦削り(下→上)	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：淡褐色 外面：〃 断面：〃	微砂粒を含む
37	壷	口径：17.4cm 現存高：14.1cm	斜め上方にやや外湾ぎみに伸びる。口縁部、端部は肥厚し内側に段を有す。体部内面は横篦削り。(左→右)	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：乳褐色 外面：乳灰色 断面：灰色	やや若い砂粒を含む
38	小型丸底壷	口径：12.4cm 現存高：4.9cm	口縁部は、やや内湾して上方に広がる。端部は丸くおさまる。体部外面上方は縦篦磨き、下方は横篦磨き。内面は横篦削り。(左→右)	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：乳灰色～乳褐色 外面：乳黒色 断面：乳灰色～乳褐色	精良な粘土
39	甕	口径：15.4cm 現存高：3.3cm	口縁部はやや外湾して上方へ伸びる。端部は肥厚し内側に段を有す。体部内面は横篦削り（左→右）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：黄白色 外面：乳灰色 断面：〃	砂粒を多く含む
40	甕	口径：17.8cm 現存高：3.8cm	口縁部はやや外反ぎみに伸び、端部近くで肥厚し、内側に段を有す。体部内面は横篦削り（左→右）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：灰褐色 外面：〃 断面：〃	微砂粒を多く含む
41	甕	口径：13.1cm 現存高：5.0cm	体部よりくの字形に屈曲し、やや内湾して上方に伸びる。端部は肥厚し、内側に段を有す。体部内面は横篦削り（左→右）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：茶灰色～灰黒色 外面：〃 断面：茶灰色	微砂粒を多く含む
42	甕	口径：14.8cm 現存高：10.5cm	口縁部はやや外反し、端部近くで肥厚して内側に段を有す。体部外面は刷毛。内面は横篦削り（左→右）（外面煤付着）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：灰褐色 外面：〃 断面：〃	微砂粒を多く含む
43	甕	口径：11.0cm 現存高：3.4cm	口縁部は2段に屈曲する。上方はやや外傾し、2条の凹線を巡らす。体部内面は横篦削り(左→右)（外面煤付着）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：乳灰色 外面：乳灰色～乳黒色 断面：乳灰色	精良な粘土
44	甕	口径：12.4cm 現存高：3.8cm	口縁部が短かくS字状に屈曲し、端部は外反して丸くおさまる。体部外面は縦刷毛、内面は横篦削り（右→左）（外面煤付着）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：茶褐色 外面：〃 断面：〃	微砂粒を多く含む
45	甕	脚部径：9.0cm 現存高：6.4cm	脚台端部内面は折り返しをもち、3段の指圧痕がみられる。外面は斜め刷毛。44と同一個体である。	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：茶褐色～黒灰色 外面：茶褐色 断面：赤褐色	微砂粒を多く含む
46	鉢	口径：20.4cm 体部径：16.4cm 現存高：4.8cm	口縁部はやや内湾ぎみに上方に伸び、端部は丸くおさまる。体部内面は横篦削り（右→左)＋横ナデ。	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：乳灰色 外面：乳灰色～赤褐色 断面：乳灰色	微砂粒を多く含む
47	鉢	口径：40.9cm 体部径：40.2cm 現存高：28.4cm	口縁部は2段に屈曲し、上方は内湾する。端部は肥厚し、狭い面をなす。体部外面は刷毛。内面は横篦削り（左→右）	G7 第Ⅶ層 土器群	内面：黄褐色 外面：〃 断面：灰褐色	砂粒を多く含む

＜TMAm　G７　Ⅵ層　須恵器＞　　付表10

No.	器種	法　量	個々の特徴	出土層位	色　調	胎　土
101	壷	口　径：15.1cm 体部径：23.6cm 現存高：16.0cm	口縁部は外反して立ち上がり、中位に断面三角形の凸線を有し、さらに外反して端部近くに断面三角形の凸帯を有す。端部はやや内傾し丸くおさめる。中位凸線上方に１条６本、下方に１条８本の波状文が施される。体部外面は平行タタキののちカキ目調整。	G７ 第Ⅵ層	内面：黒灰色 外面：　〃 断面：紫灰色	精良な粘土



第 15 図　G 4・7 出土石製品実測図

＜TMAm　G４　石製品＞　　付表11

No.	種　類	法　量	個々の特徴	出土層位	材　質
106	砥　石	幅：2.5～3.3cm 厚さ：0.6～0.9cm	横断面が長方形を呈し、うち３面が使用によって平滑になっている。使用面に擦痕が認められる。	G４ 第Ⅵ層	粘板岩
107	石　製 紡錘車	径：4.5cm 厚さ：2.1～2.6cm	断面台形をしており、表面はていねいに研磨されている。孔径は0.8cmである。	G４ 第Ⅵ層	角閃安山岩

＜TMAm　G７　第Ⅶ層　石製品＞　　付表12

No.	種　類	法　量	個々の特徴	出土層位	材　質
102	石　製 模造品	長　さ：4.8cm 厚　さ：0.6cm	中軸線上、基部よりに両側から穿孔された１孔を有する。鏨は明瞭で片面にのみ認められる。両面に縦・斜方向の擦痕がある。鏃形石製品。	G７ 第Ⅶ層	蛇紋岩

103	石製模造品	長さ：3.9cm 厚さ：0.6cm	中軸線上、基部よりに両側から穿孔された1孔を有する。鏑は明瞭で両面に認められる。両面に斜方向の擦痕がある。鏃形石製品。	G 7 第Ⅶ層	蛇紋岩
104	石製模造品	長さ：3.6cm 厚さ：0.6cm	中軸線上、基部よりに両側から穿孔された1孔を有する。鏑は不明瞭で片面のみ認められる。両面に縦・斜方向の擦痕がある。鏃形石製品。	G 7 第Ⅶ層	蛇紋岩
105	石製模造品	径：2.5cm 厚さ：0.2～0.3cm	孔径0.1cmの孔を1対あける。穿孔は両面からである。円板の周縁には直線部分をのこしている。双孔円板。	G 7 第Ⅵ層	蛇紋岩

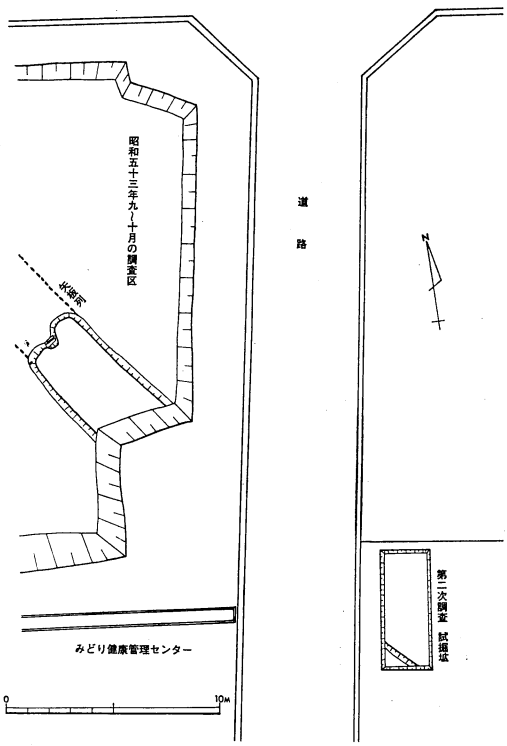
第 5 章　第2次調査の成果 (垂水町3丁目21—11)

1. 遺　構

小規模なトレンチでもあり、また、3丁目22—1で検出された水田畦道や、矢板列の延長を確認するという、目的の限定された調査であった。土層序は、

1. 黒色土（旧水田面）
2. 黄白色砂質土層
3. 黄灰色砂層
4. 灰色粘土層
5. 暗灰色粘土層
6. 黒色粘土層（瓦器若干を含む）

以下は古墳時代土師器を含む遺物包含層となる。トレンチ西壁断面によると、6層下に約18センチメートルの暗灰色粘土の土壇状の高まりがみられ、その上位には茶灰色の腐蝕質粘土層が薄くのり、一時期の地表をなしていたことが観察された。この部分はさきに検出された土壇状の畦道の延長線上にあたることから、これが畦道の延長であることが容易に判断されるに至った。さらに検出レベルが、さきの例とほぼ等しいこと、またさきに検出された2層にわたる水田面のうち、新しい段階にあたること、前後に出土する遺物の検討により、時代層が同一であることなども、その想定を裏付けるものである。

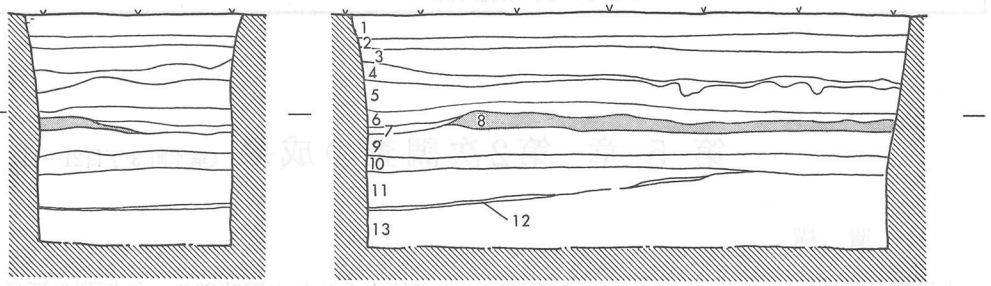


第 16 図　第2次調査区位置図

ただ、形成された土壇状の土質が、さきの検出例より、ずっと軟弱で、不鮮明であることなど、一部に相違点もある。今後、他地点の調査成果を通じて、この畦道のはたした機能的性格を考えなければならない。

この暗灰色粘土層下は、比較的多くの土器片をふくむ暗灰色粘土層となり、以下次第に砂質化して、青灰色砂層に至るのは、他地区の土層と変るところはない。

ただ、この9層から、円筒埴輪の細片が(109) 1点検出されたとは特記すべきことである。



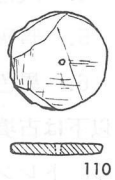
1．黒色土
2．暗灰色砂層
3．黄灰色砂層
4．灰色粘土層
5．暗灰色粘土層
6．黒色粘土層
7．暗茶灰色粘土層
8．暗灰色粘土層
9．暗灰色粘土層
10．白色粘土層
11．黄灰色砂層
12．暗灰色粘土層
13．青灰色砂層

第 17 図　第2次調査試掘壙土層断面図（左：南壁・右：西壁）

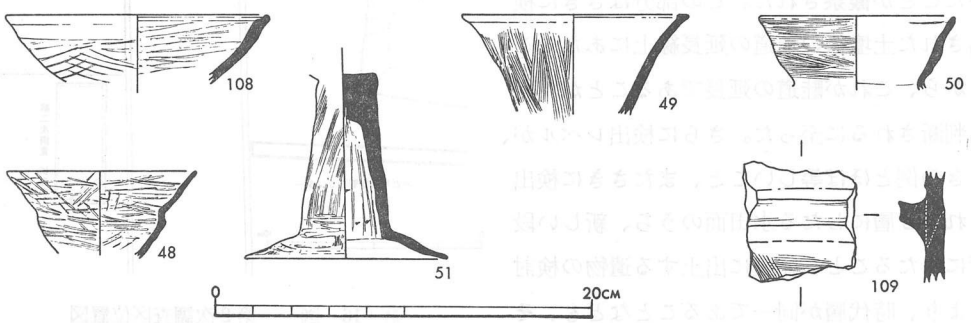
2．出土遺物

調査した試掘壙は小規模であるが、古墳時代上層の粘土層からは瓦器細片(108) が出土している。

古墳時代土器を出土した層位は暗灰色粘土層で、上層(8)と下層(9)に分けられる。両層とも須恵器は検出されていない。破片のみで完形遺物は出土していないが、高杯・小形丸底壺・壺・有孔円板などが検出された。特筆すべきこととして下層からは、土師質埴輪片が一点出土した。細片のみであるが、円筒埴輪と考えられるもので、この層は第8次調査で水田下層に相当する層位である。



第 18 図
出土有孔円板



第 19 図　第 2 次調査出土遺物実測図

＜TMDⅠ＞

付表13

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
48	小型丸底壷	口径：8.0cm 体部径：6.8cm 現存高：4.5cm	口縁部はやや内湾し上方へ伸びる。端部は薄く丸くおさまる。口縁部から体部にかけて内外面とも不定方向の篦磨き。	暗灰色粘土層（上層）	内面：淡黄灰色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
49	壷	口径：12.1cm 現存高：5.2cm	斜め上方にゆるやかに外湾ぎみに伸びる口縁部、端部は肥厚し狭い面をなす。外面は刷毛。	暗灰色粘土層（下層）	内面：淡灰褐色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
50	壷	口径：10.4cm 現存高：3.9cm	口縁部は内湾した後、上方へ伸びる。端部は丸くおさめる。外面は刷毛。	暗灰色粘土層（下層）	内面：淡灰褐色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
51	高杯	脚部径：10.8cm 現存高：9.6cm	裾部は屈曲し、内湾しながら伸び、端部は丸くおさめる。外面刷毛、内面上方は横篦削り（右→左）	暗灰色粘土層（上層）	内面：淡黄色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
108	椀（瓦器）	口径：14.0cm 現存高：3.5cm	口縁端部は薄く丸くおさめ、内側に段を有す。内外面とも暗文。外面は波状の暗文。	暗灰色粘土層	内面：灰黒色 外面：〃 断面：〃	精良な粘土
109	埴輪		凸帯断面は台形をなし、各面は外湾し、端部はシャープである。外面は刷毛。	暗灰色粘土層（下層）	内面：暗黄褐色～黒褐色 外面：黒褐色 断面：〃	0.1cm位の白色砂粒を含む

＜TMDⅠ＞

付表14

No.	種類	法量	個々の特徴	出土層位	材質
110	石製模造品	径：2.6cm 厚さ：0.3cm	孔径0.1cmの孔を1孔あける。穿孔は片面からである。有孔円板。	暗褐色粘土層（下層）	蛇紋岩

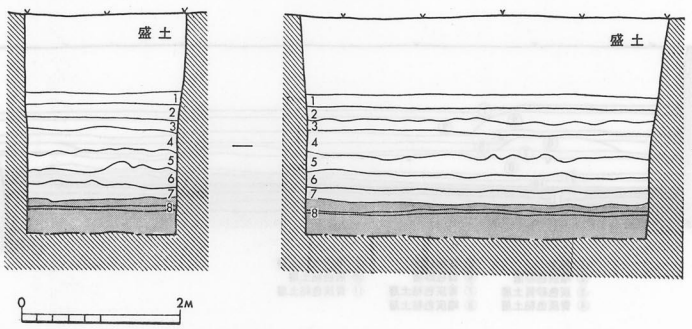
第6章　第3次調査の成果（垂水町3丁目32—50）

1．遺構

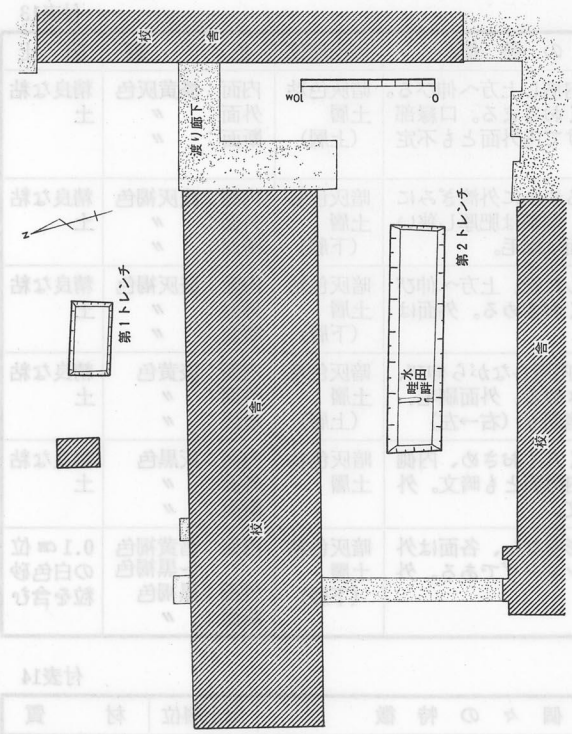
発掘調査は、2カ所で行った。北側の調査区を、第1トレンチ。南側の調査区を、第2トレンチとした。

第1トレンチ　2メートル×4.4メートルのトレンチで、遺構は検出されなかった。基本層序は

1．黒色土（旧水田面）
2．砂質土層
3．青灰色粘土層
4．灰色粘土層
5．暗灰色粘土層
6．黒灰色粘土層
7．黒色粘土層
8．青灰色粘土層



第20図　第3次調査第1トレンチ土層断面図（西および南壁）



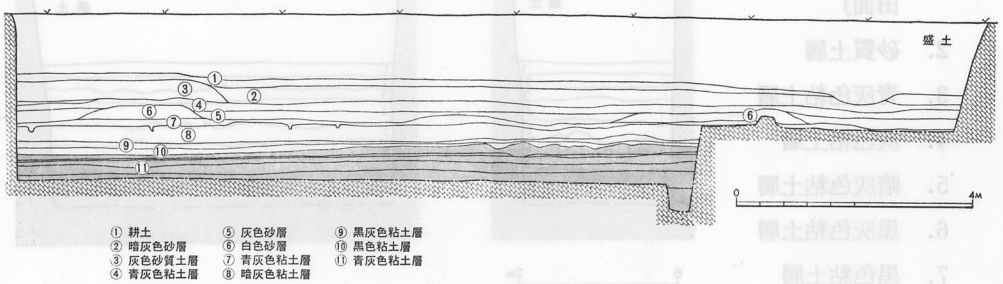
第 21 図　第3次調査トレンチ位置図

となり、このうち、5層は中世土師質小皿や瓦器を微量に包含し、6・7層は古墳時代土師器を小量ふくむ粘土層で、他地区で多量に土師器を出土する層に相当する。これ以下は、灰色砂層・青灰色砂層を主体とした砂層となり、遺物は全く検出されなかった。

第2トレンチ　東西17メートル、南北4メートルの長細いトレンチを設定し、中世期以下の層について層序調査を行った。第1トレンチとは、土層序が大きく異なり、特に水田畦畔と考えられる土壇状盛上りや、落ち込みを南・北壁の各所に検出した。このうち旧水田面下の、0.45メートルでは、瓦器・土師質皿を伴出する良好な小畦畔を検出したため、平面調査を行った。その結果、南北方向の巾25～28センチメートル、高さ11～13センチメートルの畦畔が、南端ちかくで1カ所切られており、東から西へ水が勢いよく流れた痕跡を認めたので、これは東側の水田からの水落しの跡と判断された。この水田面から瓦器細片が、若干出土しており、鎌倉時代の水田跡と考えられた。

この水田畦畔部分を保存するため、以下の古墳時代遺構の追求は、その東側部分11.5メートルにとどめた。

鎌倉期水田面は、青灰色砂質粘土層であるが以下0.4メートルの厚い暗灰色粘土層を隔して、黒灰色粘土層・黒色粘土層に至り、これから古墳時代土師器片が検出された。第1次調査におけるⅥ・Ⅶ層に相当するものと思われる。この黒色粘土層の最下層位で、甕形土器1個体が検



第 22 図　第3次調査第2トレンチ土層断面図（南壁）

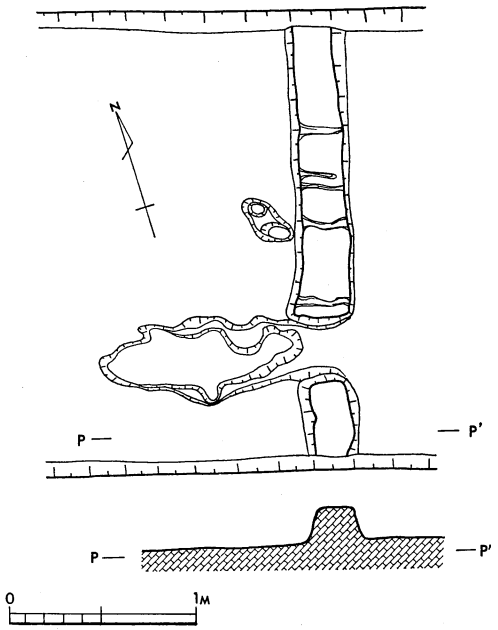
出された以外は、概して遺物は少なく、古墳時代層に関しては、第1次調査とも様相を異にしたのであった。

以下の層についても追求をすすめたが、灰色砂層を主体とした湧水の多い砂層や、有機質土となり、遺構はみとめられなかった。

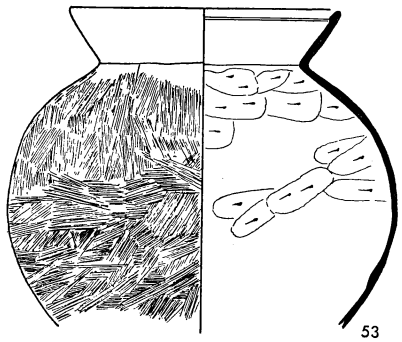
2. 出土遺物

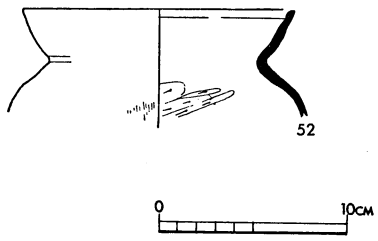
第3次調査出土の遺物は、わずかではあるが、土師器・須恵器・瓦器などがある。

第1トレンチでは、第5層から土師質皿・須恵器鉢が出土したが、いずれも図化できない小片である。第2トレンチでは第7・8層から土師質皿・瓦器椀、第9層からは、土師器甕が出土した。第10層からは、土師器甕1個体分が出土した。このうち、瓦器椀は細片ではあるが、水田畦畔にともなうもので、水田畦畔の時期決定の有力な資料となるものである。鎌倉期のものと思われる。土師器甕は、遺構に伴うものではないが、第24図に示したように、布留式に相当するものである。



第 23 図　中世遺構平面図





第 24 図　3次調査出土土器実測図

＜TMTC　第2トレンチ＞　　付表15

No.	器種	法量	個々の特徴	出土層位	色調	胎土
52	甕	口径：7.2cm 現存高：5.5cm	口縁部は内湾ぎみに伸び端部近くで肥厚し、内側に段を有す。体部外面は刷毛、内面は横篦削り（左→右）	第2トレンチ 第9層	内面：濃茶色 外面：〃 断面：〃	黒雲母を多く含む
53	甕	口径：14.4cm 体部径：20.8cm 現存高：17.1cm	口縁部はやや内湾ぎみに上方に伸びる。端部は肥厚し内側に段を有す。体部外面は刷毛、内面は横篦削り（左→右）下方に指圧痕がみられる。（外面煤付着）	第2トレンチ 第10層	内面：茶灰色 外面：茶灰色～黒色 断面：茶灰色	0.1cm位の白色砂粒を多く含む

第７章　結　　語

今年度の調査は、遺跡の南半に主体がおかれ、従来あまり明確でなかった遺跡南端について、ある程度の所見が得られた。第１次調査（通算第７次）において、垂水町３丁目27－５より、多くの柱穴、土器群等を検出したことより、遺跡は（旧）豊津中学校の校内に及んでいることが明らかとなった。同校の東南には糸田川が流れているが、その左岸では試掘・立会調査でも遺物等の検出はなく、本遺跡は中学校校内において南端をなしているらしい。この点については、昭和41年の遺跡発見当時、同校の西北側までは確実に遺物の出土があったとする在地の若村正博氏の指摘を裏付けている。

次に全体的な遺跡範囲であるが、昨年度までの成果に加えて、今年度は今回報告分を含めて、８件の発掘調査を実施したことより、かなり詳細に判明してきた。第３図の地区割でいえば、Ｂ－３区を北限として、Ｃ－４・Ｃ－５・Ｃ－７・Ｃ－８・Ｄ－９で遺構、遺物が密に検出され、さらにこの成果からＢ－４・Ｃ－６・Ｃ－９の一部・Ｄ－10（旧豊津中学校校内）にも及んでいるといえる。したがって遺跡範囲は垂水町３丁目８番から３丁目32番までの600m×200mの、南北に長い楕円形の範囲を想定でき、その方向は、南北より西へ約30°振って遺跡が展開している。この中に、住居址、土壙等の遺構の検出されたのはＣ－５区、Ｃ－８区で、次いで、今回調査のＤ－９区が新たに明らかとなり、現時点では、３個所の住居域が判明した。特に第１次調査で検出された土器群は濃密なもので、Ｇ１、２、４等で検出された柱穴群と一連のものと考えられるが、これはＣ－８区で検出された竪穴式住居址や高床式建築址（通算第１次調査）に近接して検出された膨大な土器群[10]（通算第５次調査）などと同様な性格をもつものと考えられ、これらの所見から、遺跡南端でも安定した住居域が営まれていることが明らかとなったのである。

出土遺物については、比較的まとまった面積を調査した第１次調査を主に述べる。この調査ではⅥ・Ⅶ層から多量の土師器が出土したが、Ⅵ層では少量の古式須恵器を併出している。Ｇ７の土器群を含むⅦ層からは須恵器は全く含まれていない。これら出土土師器は概ね布留式土器の範疇に含まれるものである。なかでも第13図（31）と第14図（44）・（45）は外来系・土器と呼ばれるもので（44）・（45）は従来より散見されている東海地方に多くみられる台付甕である。（31）は山陽地方にみられる口縁部が直線的にたちあがり、外面に櫛描直線文を施したもので、本遺跡では数少ない良好な資料となった。出土土師器は奈良県纒向遺跡出土例によれば、概ね纒向４式に相当し[11]、布留式土器では古式にあたる。この時期は垂水南遺跡では最も発展した時期と考えられ、Ｃ－７・Ｃ－８区の遺構群・遺物群とほぼ同時期にあたり、遺跡南端に近い今回出土地点でも、時期的には他と大差なく生活が営まれていたようである。

第２次調査では円筒埴輪片が１点出土した。タガの上辺が内湾して稜が鋭く突出しているものであり、近時に行われているような埴輪の変遷観[12]や併出土師器からみても比較的古式の円筒

埴輪であるといえる。本遺跡での出土は初例でもあり注目される。市内では東方1.4kmにある出口町片山公園遺跡では比較的多量の円筒埴輪が発見されたが[13]、これは6世紀のものである。

垂水南遺跡周辺では、古式古墳の可能性を有するものは、北1.5kmに位置し、破壊後確認された垂水西原古墳があるが、埴輪は1点も検出されていない[14]。周辺の丘陵部では他に同時期の古墳は1基も確認されていない。この埴輪は単なる混入品か、あるいは墳墓にともなうものかは現時点では判断がつかず、今後の調査の成果にまちたい。

今年度の調査で出土したもののうち、特筆すべきものとして第1、2次調査で出土した石製模造品があげられる。

第1次調査では鏃形石製品（102～104）と双孔円盤（105）、第2次調査では単孔円盤（第18図）がある。このうち鏃形石製品は本遺跡で最初の出土である。従来の調査では石製勾玉（C－5区）や大形鏃形石製品（C－8区）、双孔円盤（B－3・C－7・C－8区）などが出土しており、これら所謂滑石製模造品は比較的目立った出土をしている。特にこれらは祭祀関係遺物として注目されてきたもので、鏃形石製品は剣形石製品ともいわれ、勾玉や双孔円盤とともに剣、鏡、玉の模造祭器と考えられているものである。今回出土した石製模造品は、密集した土器群に近接した土器包含層から出土したものであり、原位置のものではない。本遺跡のこれらの祭祀関係遺物は、原位置を保った高杯形土器を主体とする土器群に伴出したC－7区の例を除いては、すべてこのような出土状態であった。

群馬県篠塚祭祀遺跡[15]をはじめとする祭祀場址から出土したこのような滑石製模造品とは数量や密度の上からは劣るものの、模造品の組合わせについては一応のセット関係と、出土状態からみたまとまりが看取できる。本遺跡のような通常の生活環境のなかにおける祭祀とその関係遺物のあり方について、今後の調査によって、さらに詳細が知られることを期待したい。

さらに、石製模造品の材質について付言しておこう。本書記載分をふくめ、本遺跡出土石製模造品は、滑石製ではなく、すべて蛇紋岩製であることが、関西大学工学部谷口敬一郎・亀井清両教授らの鑑定で明らかにされた。兵庫県姫路市長越遺跡[16]においても蛇紋岩、粘板岩を主体とする同様な鑑定結果が明らかにされているが、このような所見は他遺跡でも多分にみうけられると推定される。原材の産地や、地域的な異差、時期的な異差も問題となろう。

中世期の遺構は、第3次調査で検出した畦畔と水落し跡がある。出土遺物から鎌倉時代のものと判断されたが、歴史時代水田遺構は本遺跡で最初の例である。

本遺跡の古墳時代河道や水田畦畔が現在の条里区画と大きく異なり、豊島中条の条里施行がいつであったかということについては、考古学的にも興味ある問題であるが、河道や水路跡をみる限り、奈良時代前期（白鳳期）の河道跡が条里区画と一致していないことはC－7区（通算第8次調査）で確認されている。一方、C－8区では平安時代初頭の河道跡は南北方向に流れているのが明らかにされており、この点についての一つの目安となっている。発掘調査による限り、水田畦畔などの水田遺構としては今回の鎌倉時代のものが条里施行後の遺構として最古の例である。今後さらにさかのぼる可能性もなくはないが、現時点での一応の所見といえよう。

註

(1) 吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』昭和52年

(2) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究(本文篇)』昭和37年

(3) 井上　薫『行基』昭和34年

(4) 竹内理三編『平安遺文』第35号文書

(5) 吹田市教育委員会『吹田の文化財 第2集(遺跡と遺物)』昭和50年

(6) 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室『垂水遺跡発掘調査概報Ⅰ』昭和50年

(7) 南吹田在住 宮本照男氏 所蔵資料による。

(8) 吹田市教育委員会・吹田市下水道部『蔵人遺跡』昭和54年

(9) 豊中市教育委員会『利倉遺跡』昭和51年

(10) 昭和53年2月吹田市教育委員会がマンション建設にともなう事前調査として実施した。

(11) 橿原考古学研究所編『纒向』昭和51年

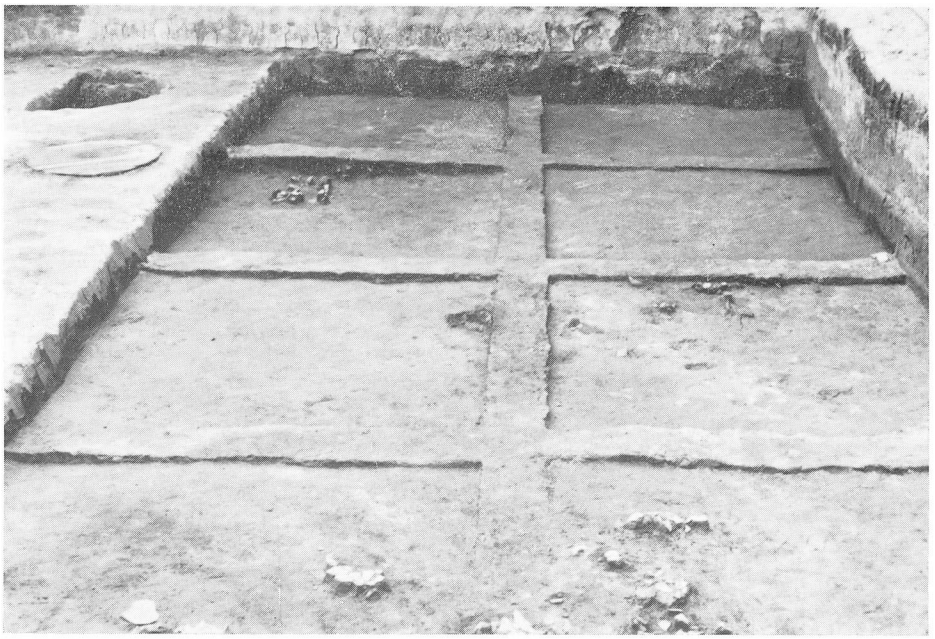
(12) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64―2 昭和53年

(13) 昭和48年9月～12月　吹田市教育委員会調査。

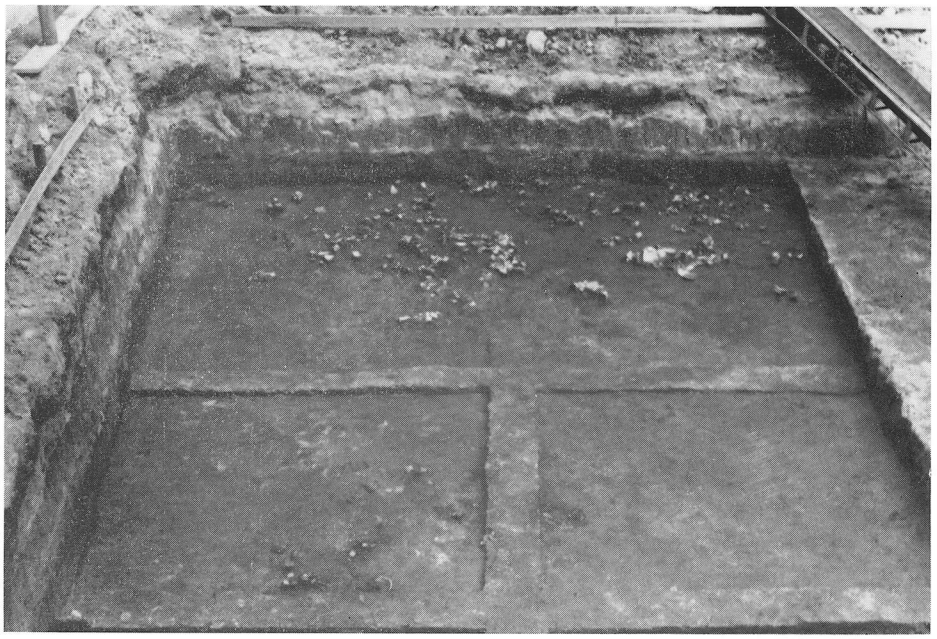
(14) 出土遺物は石材以外なく、実体不詳

(15) 大場磐雄「祭祀信仰関係の遺跡・遺物」『図説日本文化史大系』第1巻 昭和31年

(16) 兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』昭和53年



G７　検出された土器群（東より）



G７　検出された土器群（西より）

G七　土器群（上方より）

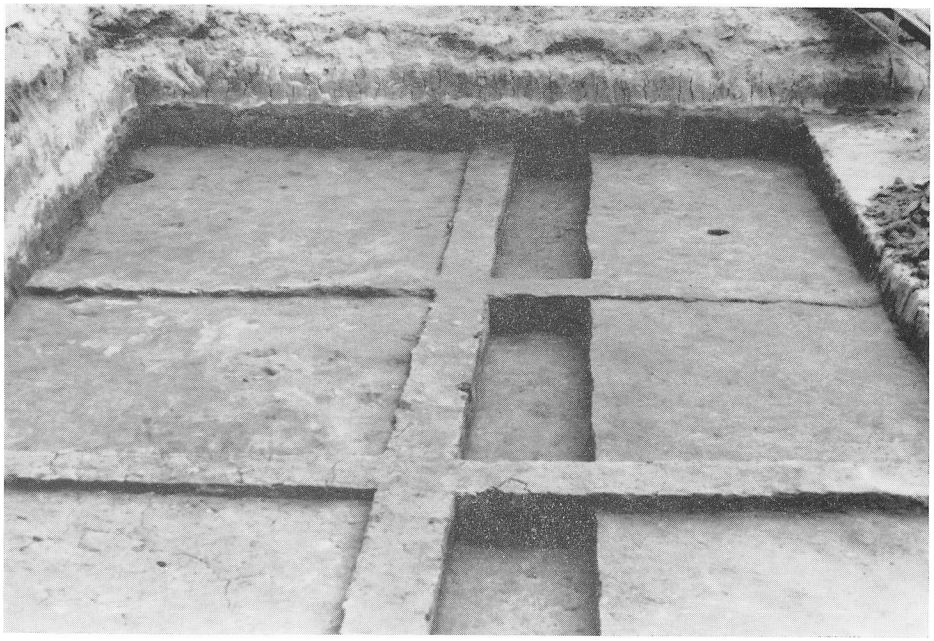
G７　土器群（北より）

土器群細部

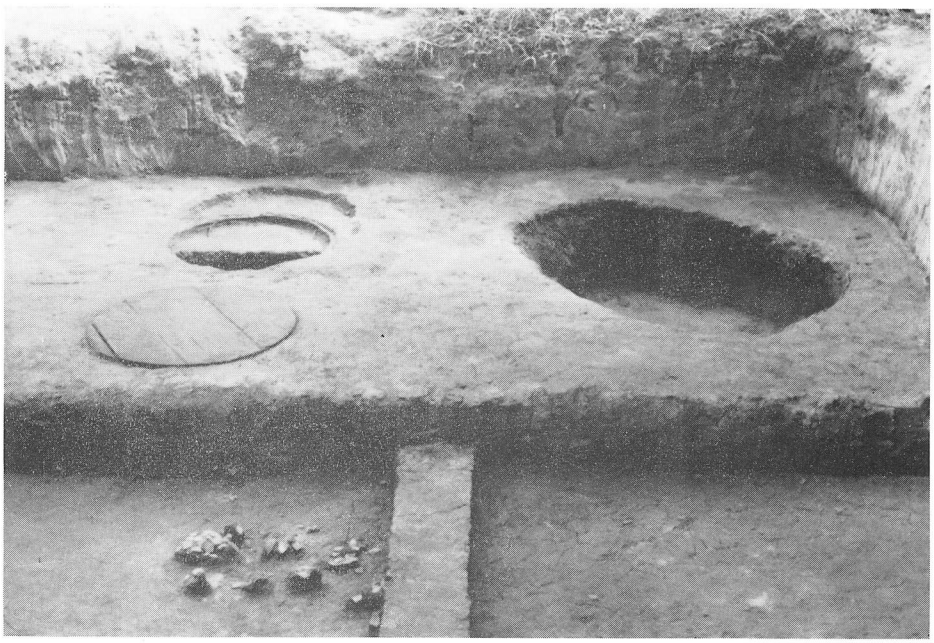
土器群細部（大形鉢出土状況）

山陽系土師器甕出土状況

土壙検出状況



発掘終了時のG 7

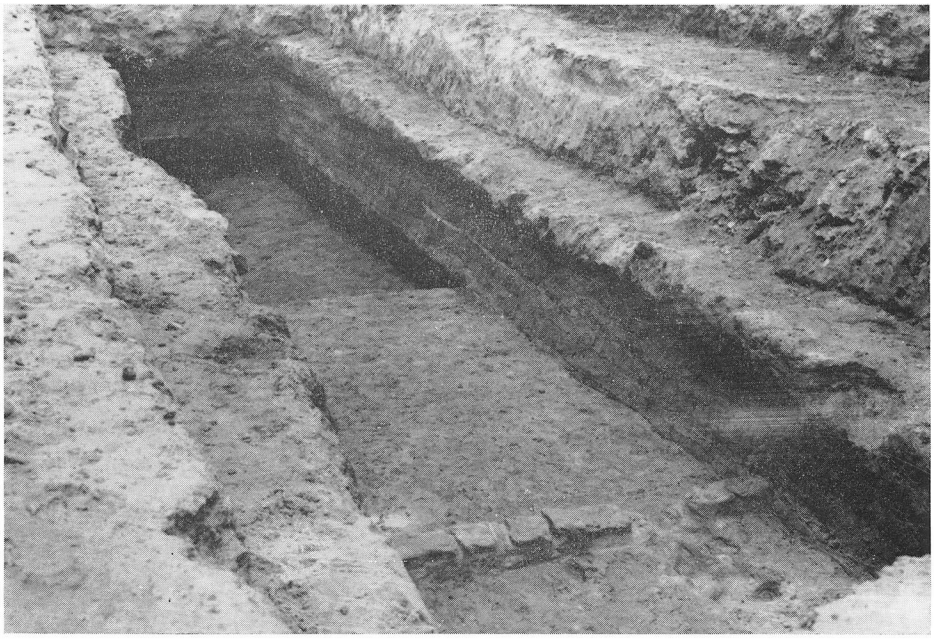


検出された近世井戸群

図版第六　第三次調査（D―一〇区）

第1トレンチ（東より）

第2トレンチ（東より）

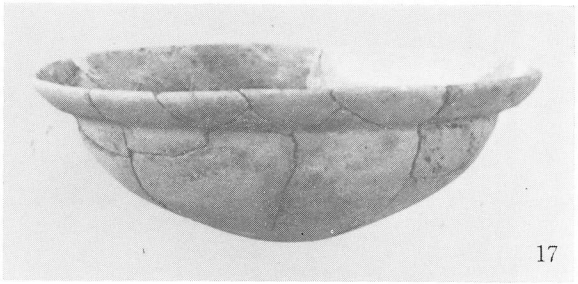


第１トレンチ調査状況（手前は鎌倉時代畦畔）

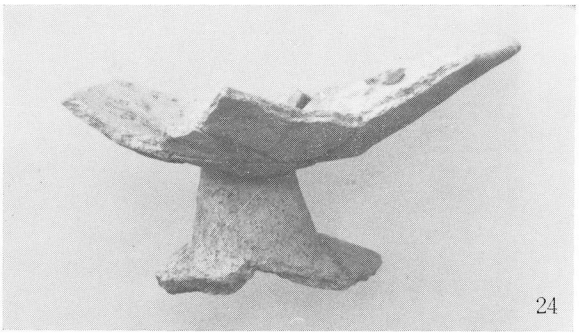
鎌倉時代畦畔および水落し跡

図版第八　出土遺物（第一次～第三次調査）

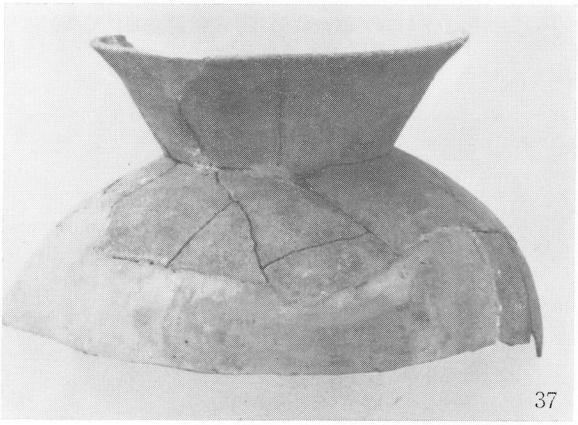
14


17

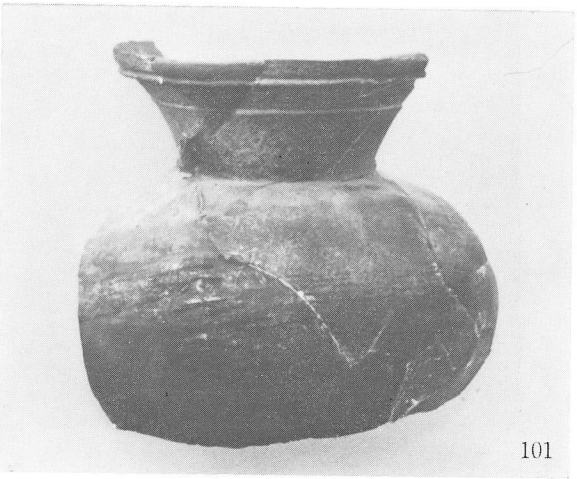
45


24

31


37

53


101

垂水南遺跡発掘調査概報Ⅲ

昭和54年３月31日発行

編集・発行　吹田市教育委員会

大阪府吹田市泉町１丁目３番40号